

35
264



始



35-264



字の起源

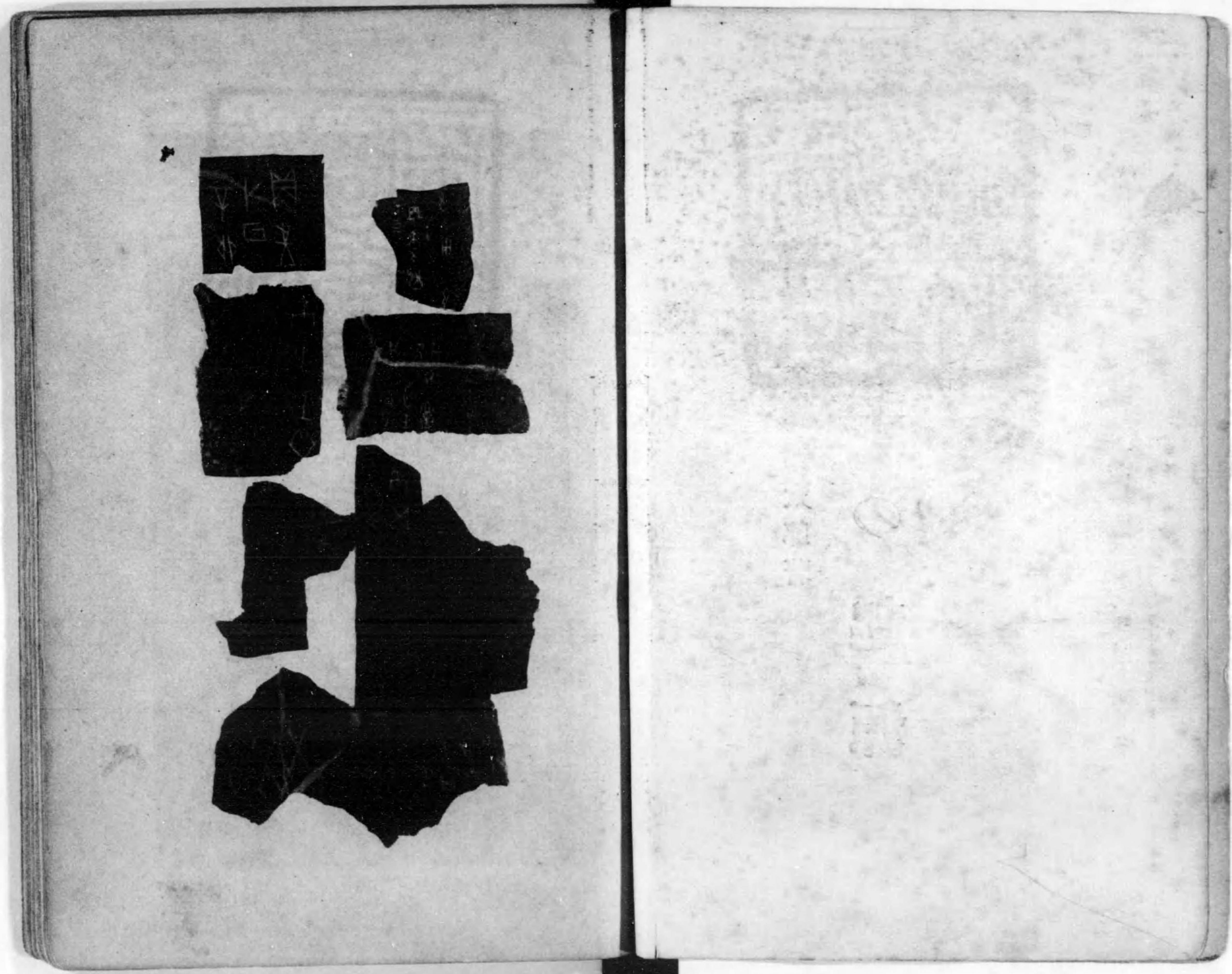
後藤朝太郎著

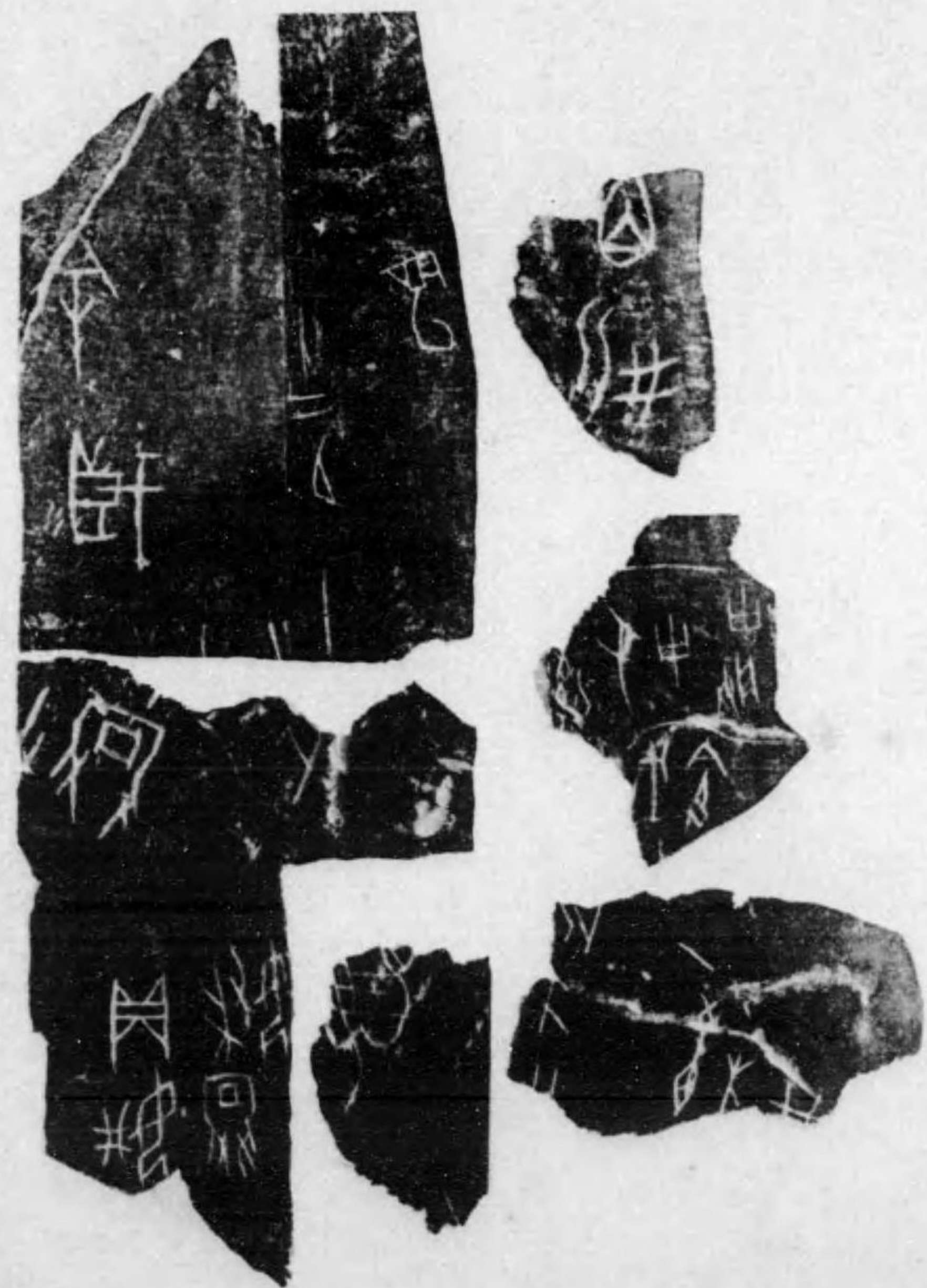


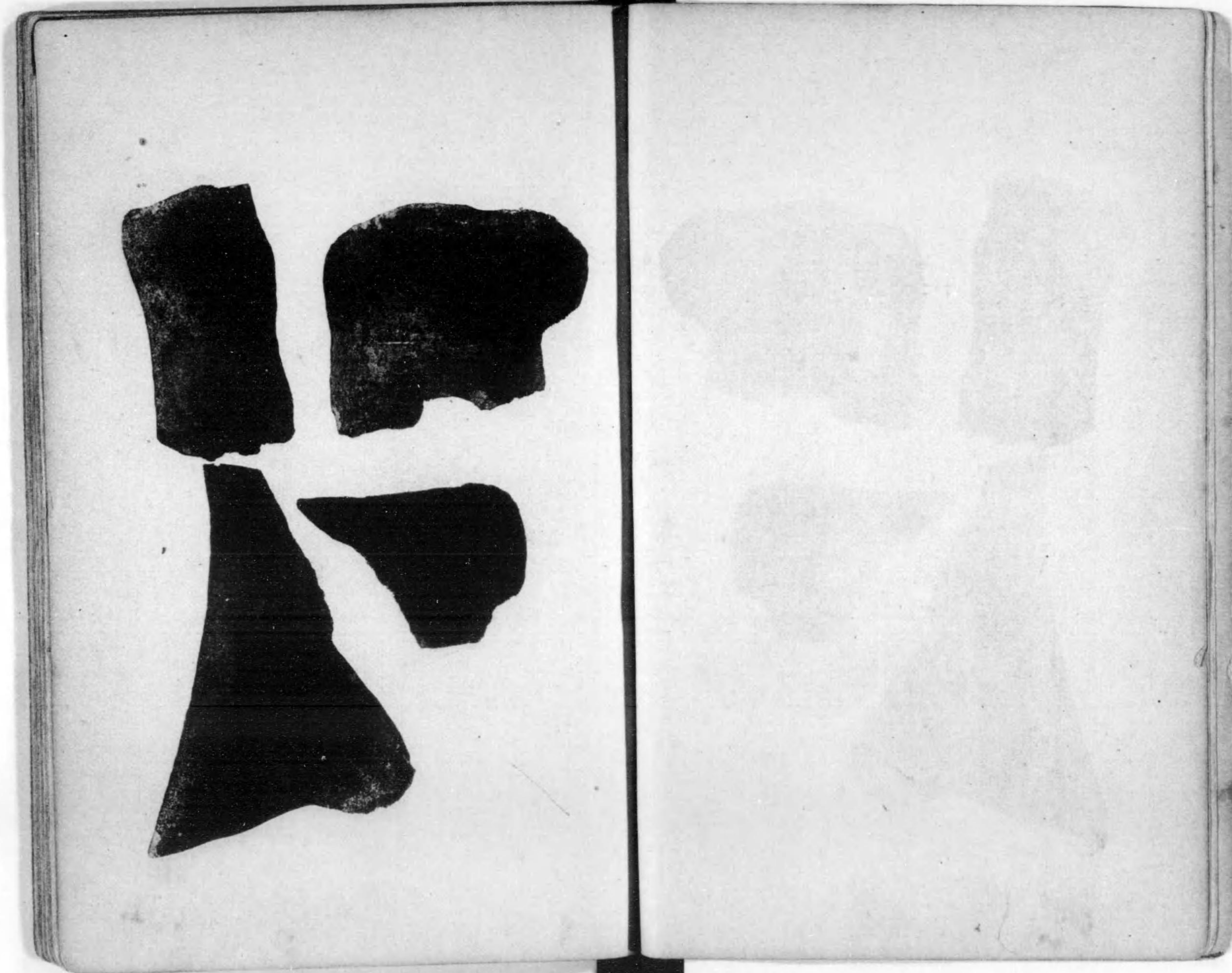
52-15

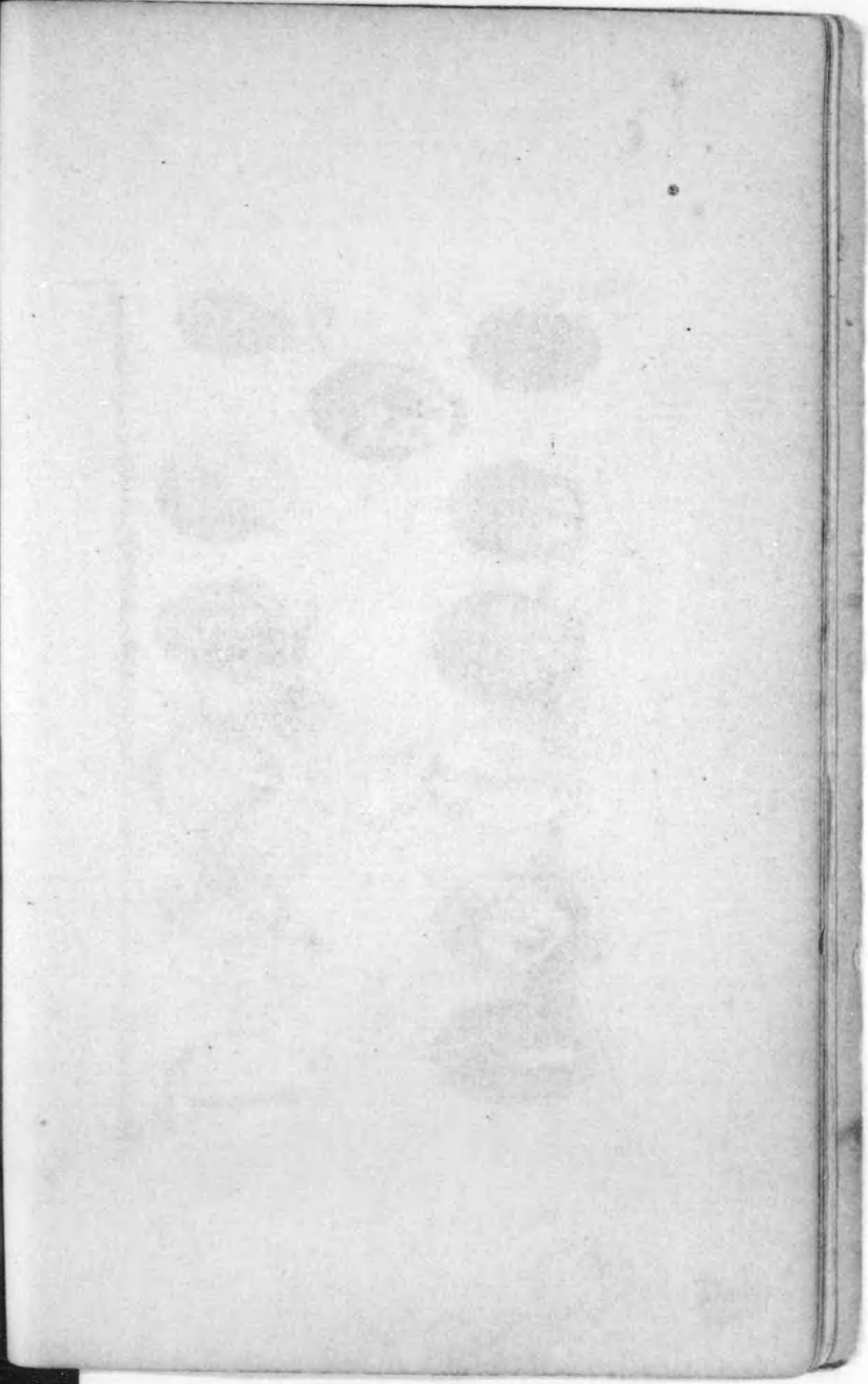
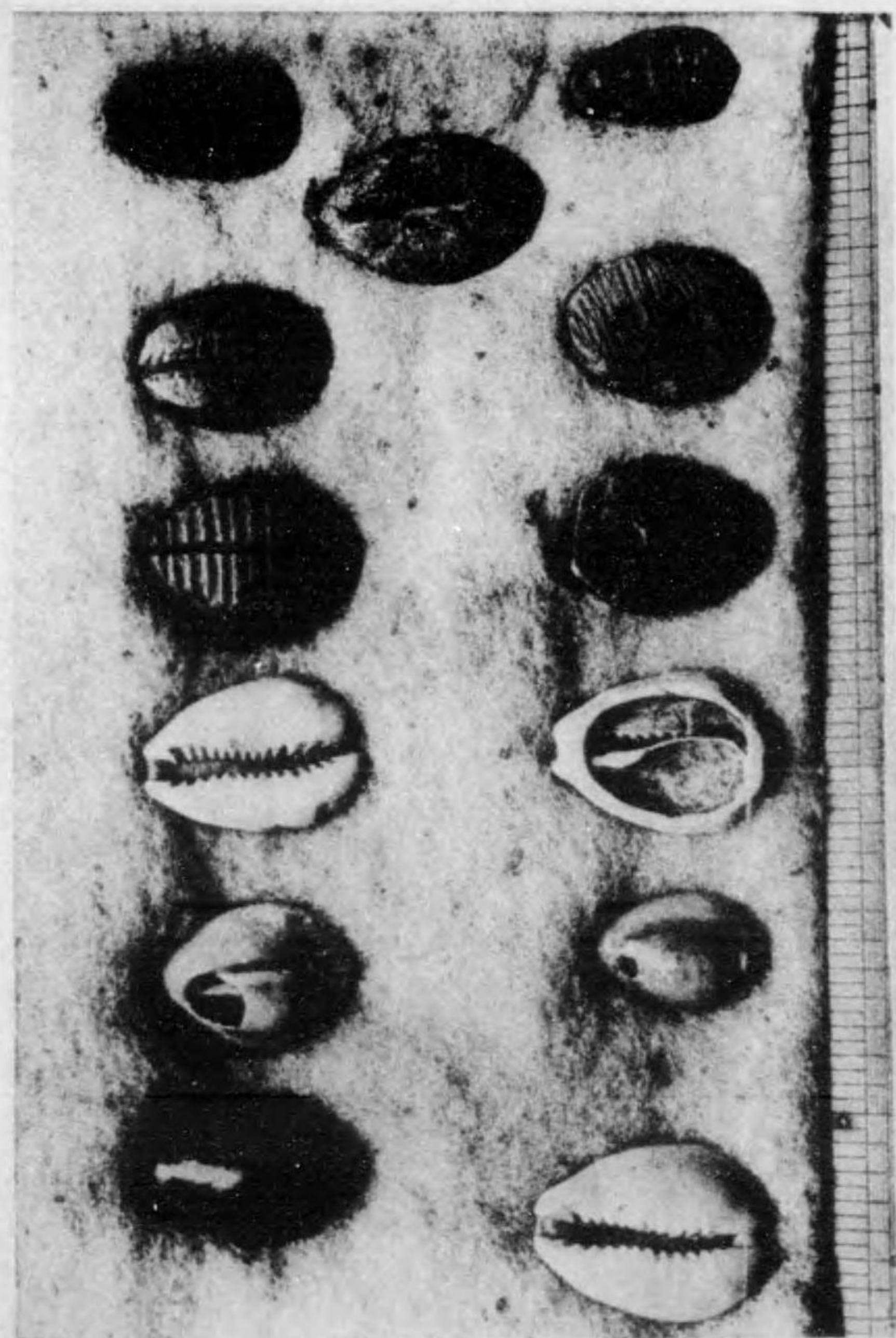
主幹	龍居文學士
會長	新渡戸博士
總裁	後藤男爵
	通俗大學會











通俗大學文庫は廣き意義に於ける國民教育の一助たらんことを庶幾し、總裁後藤男爵、會長新渡戸博士、主幹龍居學士等題材を撰擇して専門大家の玉稿を請ひ、幹部各自亦時に執筆す。一紙能く廬山の全景を寫さんこと極めて難しと雖も特に洗練せる最少數の文字を假りて、古今東西に渉る諸科の智識を容易に社會の各階級に溥及せしめんと欲するものなり。幸に大方同志の贊襄を蒙り、多少大正昭代の文運に裨補するを得ば吾儕の至願乃ち足る。

通俗大學會同人白す

文字の起源目次

第一章 緒論……………一

一 何の爲めに文字の起りを調べるか……………一

二 字源を調べる二つの目的……………五

三 文字は歴史以前の文明を語る……………三

四 文字には生命がある……………一七

五 略字を擁護すべし……………三

六 古代に現はれた略字……………二九

第二章 假名の起源……………三

一 假名の由來……………三

第二章 假名の起源對照表……………四一

第三章 文字構造の意匠……………四七

一 倉頡は人に非ず……………四七

二 所説六書の解釋……………五一

一 象形……………五三

二 指事……………五四

三 會意……………五七

四 諧聲……………五八

五 轉注……………六三

六 假借……………六五

第四章 支那文字の西方起源說……………七〇

一 説文と鐘鼎文及び龜版文……………七〇

二 支那文字西方起源說の由來……………八一

第五章 アツシリア・バビロニア文字……………八七

一 楔形(くさびがた)文字……………八七

二 楔形文字の見えて居る資料……………九六

三 楔形文字の特色……………一〇一

第六章 埃及文字……………一〇五

一 ロセッタ石……………一〇五

二 繪文字としての埃及文字……………一〇八

三 音字としての埃及文字……………一一三

四 埃及文字は支那字に關係なかるべし……………一二九

第八章

一	年の字	一九一
二	農の字	一九二
三	男の字	一九三
四	畜の字	一九四
五	戦の字	一九六
六	盾の字	一九七
	その三 任命のしるし	一七三
	その四 血をすすする風習	一七六
	その五 行政區域としての縣の起源	一八二
	その六 玉を好む思想	一八七
	文字の起源	一九一

第七章

一	文字の綜合	一四〇
二	貝の説	一四二
三	糸の説	一四七
四	示の説	一四九
五	又の説	一五三
六	大の説	一五六
七	衣の説	一六三
八	文字を生みたる社會	一六四
九	數字の發達	一六四
一〇	父母の考	一六九

七	喜の字	………	一六
八	法の字	………	一九
九	得の字	………	二〇
十	馘の字	………	二〇
十一	族の字	………	二〇
十二	郷の字	………	二〇

文字の起源 目次終

文字の起源

文學士 後藤朝太郎



第一章 緒論

一 何の爲めに文字の起りを調べるか

文字は最初出来た當時の形と今日の形とは著しく變つて居る。今の字形は今の人は見慣れてゐる通り昔の字形は昔の人に合つてゐた。若し今の人に昔の文字が突然見せられたならば見慣れないから變に思はれる。わけて文字の生れたばかりの最初の形であるとは何と

讀むべき字であるか見當のつかぬものがたくさんある。時代が經つに從つてそれらの古文字は次第に縁遠くなり遂には今日からは全く没交渉の字形になつて了ふ。かやうに縁遠い又没交渉の文字に慙々遡り、その最初の形を調べるなどは何の益にも立たぬことと思はれるであらう。それを殊更ら茲に深入りして研究して見ようと云ふわけは一に學問上の立場から出てゐるのである。

古來東洋の天地では文字は教育上のバロメーターとなり目に一丁字なき人と云へば教育のなき人、また文字ある人と云へば教育ある人わけて詩文でも出来る人と見られてゐる。謂はゞ文字の有無はその人の品格を上下する重要な條件となつてゐたやうである。國にあつても同様で、國に文字がありその文字が整然と出来て居りそのよ

く文明の利器として實益を擧げてゐるならばそれは國の誇りである。又國家百年の策でもある。しかし國亡びて文字ありと云つたやうな老大國支那に在りては文字獨り榮えて國力之に伴はず國を擧げて漢字の中毒に罹つてゐること幾世紀と云ふやうな結果になつてゐるのを見ると全く文字は國に禍をなすものとも云へる。個人や國家に文字がかほどまでに關係をもつものであつて見れば文字を實益の方面から修得調査することは緊急問題の一つとなる。之に反して學問の立場から之を研究すると云ふことになる。と別段一日を争ふ性質のものでなければ何をさて措いても國民の全體に之を強ひなくてはならぬと云ふものではない。しかし學問として之を見る時には又自ら別に目的とする所があつて學問社會には相當必要なる問題となるべ

き性質のものである。我が邦では今日尋常小學を卒へた人々は一千三百六十字を覚え、中學を卒業したものは四千乃至五千の文字を識つてゐるわけになつてゐる。いま日本國民の平均文字力が二千臺にあるか、三千臺にあるか、但しは四千臺に上つてゐるかきめられな
 いが、振假名ふりがなのない新聞雑誌の立ち行かぬ現在の有様からするとまだ二千臺に在ると見ても覺束ない程であるが然し本書の購讀者は平均三千臺あたりの程度にあるものと見てこゝに文字の過去に遡り造字の由來を説いて見ようと思ふのである。

實際問題を離れて、學問の立場から行くところの文字研究には色々の目的がある。しかし文字の起源のしらべに就いては自分また特別の目的がある。文字を實用の側以外に考へないものには無用の仕

事としか見えぬであらうが、無用の別天地の調べも時には却つて實用方面を潤ふす河川の泉源となることもある。田野の埤圳に活く農夫も時に背後の山境水源の状態を知るの必要がある。山の向ふでなされてゐる開拓調査が所謂別天地扱ひをされ、平地で活ける人に紹介されずに了ると云ふことは遺憾なことである。いま次節以下に字の源の調査目的その他に就いて述べる所は山地と平野との連絡をつけんが爲めの開鑿に過ぎぬのである。

二 字源を調べる二つの目的

文字の源を調べるには二つの大きな目的がある。第一は文字の最初の構造を明にし、例へば目とか貝とか爪とか瓜とかと云ふやうな文字の出來かたを詳つまびらかにし、又もし血とか縣とかのやうな複合文字

であると、その要素たる偏や旁つひが何であるか、又血と皿とは如何なる関係があるか、又縣と系とはどう云ふ間柄であるかを尋ねるのである。また目の字なら目の字をとつて此れから見だの、瞿あそるだの頁かほだのと云ふやうな文字が出来、また貝からは負だの、貧だの、賢だの、最だのと云ふやうな文字が出来てゐる。がすべてこれらの現象は最初一の文字からたくさんの子や孫にあたる文字が出来たのである。これを文字の發達と云ふのであるがその間にたとひ旁系として色々入り亂れた文字の生ずることはあつても、大體その系統は亂れずに發達して行つて枝から枝を生ずると云ふふうになつてゐる。その反對に死んで行く廢字もたくさん出来る。すべてこれらの文字の出来始めやその文字相互の間に現はれたことを秩序正しく

系統的にしらべることが字源研究の一の目的となつてゐるのである。之を簡單につづめて云へば第一類の方の文字しらべは文字本來の性質構造を詳にしてその系統發達を研究するに在ると云ひうる。それ故にこの側の調べは文字の既に出てから後の状態に就いての調べであつて別段文字以外に出ることはない。すべて其の取扱ふ所ものは文字學の範圍内に在るのである。

6 字源研究の目的の第二は之と異なり既にしらべられたる文字の最初初の形、學術上で之を文字の元始形と云ふのであるがその形を基礎とし、その元始形から出立してその文字の要素なり構造なりを手懸かりとなし文字の形に見えてゐない方面にまで進んで行つてその文字を生み出した大昔しの社會に及ぶのである。その社會が如何なる

程度まで開けて居たか。その當時の世の中にはどんな風俗があり、習慣があり、迷心があつたか。また祭り祈り禁厭まじやひうらなひなどはどのやうにして行はれるたか。國さかひはどのやうにして居たか。國邑は如何なる状態であつたか、政治をとる人はどんな資格のものであつたか政治のしかたはどうであつたか。法律と云ふものはどれ位の程度に在つたか。刑罰その他の制裁は如何なる方法で行はれてゐたか。訴訟に就いてはどんな事實が窺はれるか。また戦争はいかなる武器を用ひてゐたか。戈だの楯だのと云ふものはどんな形をしてゐたか。旗にはどんな種類があつたか。また經濟の方面で農・工・商の外に牧畜がどんなに行はれてゐたか狩獵のことはどれ位の程度に行はれてゐたか。獲物としてはいかなるものがとれてゐたか。鹿はど

んな角を有してゐるものが獲れてゐたか。鳥を捕るときに網はどんな形のものを使つてゐたか。貨幣財産にはどんなものが顯著であつたか。貝はどんな形のもので貨幣として用ひられてゐたか。また絲は如何なる形をした纒いとに絞られてゐたか。紙の原料にはなぜ楮でなく絲が使はれてゐたか。また工藝の方で玉の彫刻がいかに巧であつたか。玉が社會上に政治上に重きをなしてゐる状態はどんな風であつたか。その他鑄金の法はいかにして行はれてゐたか。といふやうな經濟工藝方面のことになると比較的よく知られてゐた。また父なり母なり祖先なりに就いての考へかたはどんな風であつたか。相續の習慣はどうであつたか。孫と云ふものはどんなものと考へられてゐたか。又鳥なり獸なりはいかに畫かれてゐたか。象や龍は太古

どんな形で見え始めてゐるか。天とか雨とか又雲と云ふやうなものは如何なる寫生法によつてゐたか。これら太古の社會狀態各般のことにわたりその文明の有様は大抵知られるのである。そのこれら各方面の文明の狀態を稱して文化と呼ぶのであるが、文字學の方ではこれら上古の文化を見ることを以てむしろ應用の側のしらべとするのである。文字の起源をしらべると云ふことはこれらの背景的上古の社會狀態を知り、上古の文化にまでも及ぶことにしなくては折角の文字の起源の面白いことを理解することはできないのである。文字の最初の形なり構造なりを眞に了解しようとすれば是非ともこの文字の出來た當初の社會少なくともそれら古代文字の行はれてゐた當時の社會に見ゆるあらゆることを知り悉してゐることが大切であ

る。さうでない、例へば賢人の賢の字になぜ財貨の貝が含まれて出來てゐるのか判らぬと云ふことになる。文字起源の研究はかやうな種類の問題に常に觸れるのである。それ故之をつめて云へば第一類の文字しらは古代文字の形や構造を基礎として上古各般の文化の歴史に遡りその當時の社會文明を明にすると云ふに在るのでこれが字源研究の第二の目的となるのである。

かやうなわけであるから第一方の目的に添ふ調べでは文字そのものばかりを取扱ひ文字相互の間の正閏を定め、文字調査の出發點である所の文字の標準及び系統をきめて行くものである。第二の目的に添ふ調べでは之とは全く目的を異にし、字の正非をしらべるとか字の標準系統のこととかは主でなく古の遺物とか遺跡などを基とし

てしらべる考古字などと共に古の文化を窺ひ知り後世文明の沿革歴史の出発點を明にしようとするのである。されば前者は文字學そのもの、上に一つの確實な基礎を與へるものであるが後者はそれよりもむしろ支那古代文明史の上に一つの確實な土臺を與へるものとなるのである。これ迄字源の調べと云へば今から約一千八百年前の後漢時代かんじだいに出來た説文せつもん(後章に説明あり)に據つてゐた丈でそれ以上更に新しい方法で上述二種の目的に叶ふやうなしらべはして來なかつた。今日では説文せつもん以上に周時代の古銅器の銘に見えてゐる古代文學もたくさん出てゐれば周よりも今一層古い時代の材料も續々出て來るやうになつた。それで昨日まで説文せつもんの解釋で認められてゐた説でも今日は根本資料の出した爲め破られると云ふ有様である。最早や説

文のみが必しも金科玉條でないことになり今日の字源研究者は説文より入つて更に説文を超越しなくてはならぬ時代となつたのである。

三 文字は歴史以前の文明を語る

字源のしらべはかやうに二様の目的に向つて進むことが出来るのであるが本書には字の性質系統正閏の論をなすのではない。本書は専ら前節に説いた第二類の側のしらべを紹介するものであつて、文明史の立場から古代文化として知らるゝ種々の方面の社會状態を述べ、その側の調べが文字の緒によつて開かれると云ふことを證明するのである。

由來古代のことを調べるには古代の記録によるを眼目としてゐ

た。しかし記録には筆が潤色があり誇張あつて必ずしもいつも事實の真相のみを傳へてゐるとは云へぬ。文字は之に反して字の最初の形構造と云ふものはその當時の社會が一般に認めてゐた史實むしろ有史以前の事實を赤裸々に偽ることなく表はしてゐるのである。

この故に古代文明の神髓を拉し來らんに古く最初の字體の構造によるを便法となすのである。文字は唯一の一字でもその構造は一つの文章にも匹敵する。文字はその一字分の占めてゐる面積は狭いが含蓄は多い。後に説明する如く縣の一字をとつて見ても又賢の一字に就いて見てもその構造と云ふものは立派に上代の複雑な史實を物語つてゐる。文字は幾つかの要素から成立つてゐるものが多いがそれらの要素には皆或る約束的の意味がついてゐる。その要素が寄合


ひ配合せられて出來た文字には必ず含蓄の多い意味が存してゐるのである。上古の文字にはその背景たる社會の文化がついてゐる。それ故その字形なり字義なりは文明史の上に重要な價值をもつものである。然るにその字形字義と云ふものはいつまでもそのもの約束的の形で止まつてゐない。今の人に古の象形文字(後に説明せり)が讀まれないのもその爲めである。今日の鳥の字には少しも鳥の姿が見えてゐないが古の形であるとも一目瞭然である。又ローマ字のAの字は何の形だかこれのみでは判らぬが埃及の鷲の左向きから出てゐることを知るときはその間の沿革を辿ることが出来る。又埃及の獅子の形から來たLの字などのその先驅をなせる古の象形繪文字を見て始めて納得される。突然今日の字形から古を揣摩することは出來ぬ。

かやうにして古の文字は時代の移り變ると共に何れの國の文字も著しい變化をなしてゐる。たゞに變化するばかりでなく本來の意未を全然失ひ音字となつてしまつてゐるものさへある。ローマ字や假名はその一例である。

文字がその最初の意味を失ひ又その最初の形を失ひ、遂には全然變つた意味や形をとり時には全然音字となつて了つてゐるも尙且つ文字として行はれてゐるに就いてはその變遷の裏面に何か終始一貫した力の流れてゐるものがあることに氣がつく。この力が文字を生み出し又變化をなさしめ又常に活動をなさしめてゐるものである。この力を稱して文字の生命と云ふのであるが左にこの文字の生命のことに就いて少しく述べて置く。







四 文字には生命がある

文字は生物に非ず。單なる言葉の記號である。記號なる文字に生命があると云ふは生物ならぬ記號に生理的の活力の存してゐると云ふ意味ではない。その^力に生命の存してゐると云ふ譯は文字の使用せられてゐると云ふことその點に存するのである。さればその文字の使用が全然止まつてしまへばその字は死字または廢字となつて了ふわけである。而してその^力を生かせる^と死なせる^{とは}一に懸りて社會にある。社會の一般に認められ理解せられそして實用に供せられてゐる文字であるならばその文字は生命を有してゐると云ひ得る。どれ位合理的によく出來てゐる文字であつても生命のない字は文字としての資格を失つてゐるものである。古い時代に使用せられてゐ

たことがあつてもその全く使はれてゐなければその字は死字であることは勿論なるが上古には此の類の文字が甚だ多い。周代の死字には歸の字を冠として下に皿を書いたもの、又弓を左右に並べて弱(彊の字)としたもの、また爻の扁に支を旁りとしたものまた最も複雑なものには  (後の招の字)の如き字もある。

更に支那最古の文字として嘗つて龜甲獸骨に刻まれたものを見ると次の如き死字がたくさんある。即ち

	未詳		弄の字か		未詳
	農の字か		占の字か		未詳

 羔の字か
 馘の字か
 盾の字か
 未詳
 晋の字か
 未詳

これらは少なくとも今日から三千五百年乃至四千年以上の古の文字でうらなひ用の文字として行はれて居たものである。恐らく當時の常用文字であつたことと思はれるがこれらの死字は尙埃及の墓碑銘の文字等と共に世界最古の死字として永遠に遺つて行くものである。

支那の死字はかくの如き四千年前に行はれてゐた太古の文字ばかりを云ふのではない。死字は周にもあれば秦漢時代のやうに今から二千年前後の古にもたくさんある。更に降つて三國時代とか六朝時

代または隋や唐あたりの近代になつてからもたくさんある。唐の有名な則天武後の新字の如きもクニの字の圍ぐらゐるは残つて居るがその他の奇字は大抵その時代限りで死字となつて了つた。地の字を壑となすものが稀にあるがこれもその武後の新字の名残りである。宋から元にかけての間には北方や西方に種々の新字の制定があつた。契丹とか女真とか西夏とかの異様の文字が即ちそれである。中でも女真の大字と小字、また西夏文字の如きは國の滅亡と共に跡なく亡びて了つた。今日支那の河南省や朝鮮の北成の碑にまた居庸關の刻文や朝鮮李王家の寶鏡背面にその名残りを留めて居るのを見るがこれらは全然死字となつて了つたものである。かくの如く文字の一部分又は全體が死滅し用途の少ない文字は長い時代の間いつしか淘

薩迎会

汰されて了ふのである。文字政策で一時的の強行をなさうとしても自然の大勢には勝てない。自然界の現象、生物界の原則は文字界にも矢張り窺はれる。適者は榮え不適者は滅ぶ。適せる文字は「著」から着を出し「茶」から茶を出し「奉」から捧を出してゐると云ふやうに増殖して行く。又人力車が俥となり海里が湮となる。されば各時代には一方に死字の出來ると同時に他方に新字新形が出來て茲に文字の優勝劣敗が行はれて行くのである。

五 略字を擁護すべし

古來各時代を通じて見ると文字の新陳代謝は意外に多く行はれてゐる。殊にその新形の出來又新字の出來ると云ふことは社會の背景に常に支配せられてゐるのである。國に納むる所のみつき(貢)もの

が貝貨であつたときには財貨の意味で、造字のときには貝を用ひ貢(みつぎ)の字が出来る。が其の改まつて禾稻の束を納めるときになると禾偏を加へた租とか税とか云ふ字が生じた。古の經濟は貝貨が流通貨幣として用ひられてゐた爲め貝をたくはへることを貯となし貝の落ちて市都のにぎやかになるを賑となし、貝を盗むものを賊となしてゐたと云ふわけであつた。貝を寶として貴んでゐた爲め貴の字ができ、之を分けることより貧と云ふ字も出来た。貴なり寶なり貧なり賊なりに貝の含まれたるわけは皆社會の状態が文字上に現はれたのである。詳細は後章に述べるがかくの如くして文字の要素は最初少數のものが次第に他の要素をとつて殖えて行く。貝より貢ができると更に之を音符として楨の字が出来るると云ふ風に枝から枝が

分岐

咲いていつしか文字は複雑になる。むかし鳥の形にかゝれてゐたフルトリの佳が口をとつて唯(たれの義)となりそれが言をとつて誰となり、又唯が虫をとつて雖の字にもなる。かくの如き文字現象を稱して文字の分岐と云ふ。文字の分岐は數限りなく行はれて行つてしまひには複雑な文字がたくさんできる。そこで之を略して行つて書くときの手数を省かうとする傾向が現はれて来る。略字の行はれるのはその爲めである。

かつては面倒とも思はれないで書かれてゐた文字の僣だの狸だの、
糺だのと云ふものが今日ではそれく、仙、狸、杉に改められてしまつた。

(本字) 僣
(略字) 仙

(本) 狸
(略) 狸

(本) 糺
(略) 杉

この類のものは外にもたくさん見出される。例へば

擔 <small>(本字)</small>	担 <small>(略字)</small>	棲 <small>(本)</small>	栖 <small>(略)</small>	樸 <small>(本)</small>	朴 <small>(略)</small>
擇	扱	黏	粘	嬢	娘
鹽	塩	體	* 体	禮	* 礼
廟	廟	對	對	學	學

である。文字として實際多く書かれてゐるものはその略字の方である。日本ではもし活字の上に此の本字の形が示されてゐなかつたとしたならば、略字の勢力と云ふものは今一層ひろがつてゐたのである。筆でかく方の例では専ら略字體を用ひ煩しい本字は書く場合が少ないのである。總體物の簡易を好む日本人には略字は大いに歡迎せられるが支那の本場ではいかゞであるか。と云ふに、もと支那人

は日本人と異なり何かにつけてこつてりしたしつこいものを好む傾がある。制度文物風俗料理すべてそれである。建築工藝には最もそれが明示されてゐる。詩や文章を見ても貧弱な内容をさも豊富のものらしく聯駢對句形容至らざるなく、濃厚複雑なる氣持を現はしてゐる。これは支那人は肉や脂肪あぶらを好み日本人は刺身さしみや野菜やさいを好むによると云ふものあれどもまさかそれ丈の理由であるとは思はれない。とにかく繁文縟禮を好む丈に支那人は文字のことも中々雜然としてたゞひやみに難書なんしょのものを用ひて少しも之を苦しめない。これは言葉の單綴組織(タンとかカンとか)で之に四聲をつけて意味を示せる語(せる語)なるにもよるであらうが本來外觀美にあこがれる國民であるから難字を苦しめないのである。見ると云ふことに觀、視、眺、

覽、瞰、看などの多いのは日本人にとっては閉口であるが支那人には之でも尙不足で看看だの眺望だの色々作つて居る。とにかく支那では外觀美に重きを置く爲め難字の本字がそのまま行はれてゐる。しかしひろく社會の實際に就いて見ると實用方面は意外なものである。支那人も中々かしい。否實際倍屈贅牙な四角四面の文字のみを書いてゐられないものと見える。四書や五經に見ゆる四角の文字は儀式用の脅し文字である。裏面は中々融通の利いたもので案外たくさんの略字を使用してゐる。尤も日本のやうに草書を用ひるものと云つては殆んどない。草書は一部學者の外はよめぬ。大抵のものは楷書式の略字を用ひてゐるのである。
むかし佛教の經文を寫す人は手数を省く爲めに、例へば

善^ㄨの字の冠のサをとり、又薩^ㄨの字の冠サをとり菩薩^ㄨをサ^ㄨと書いてゐたことがあつた。或は縁覺の二字よりヨヨをぬきとつて之をヨヨ(縁覺)と讀んでゐたこともあつた。しかしこれは寫經生共の間にのみ行はれてゐたことでひろく見られることではなかつた。これ程の簡略主義が行はれると云ふことはいかな支那實用社會にも之を求むることはできぬがしかし随分思ひ切つたのがある。左にその略字の一群を列擧してあとにそれぞれ之にあたる本字を示して見よう。即ち

支那現行の略字例

叔	収	覘	難	刈	儀	罗	柔	战	步
仆	丰	旺	舟	好	娘	牝	归	办	迹

協 過 時 陰 陽 儀 遠 園 還 怀
之に對する本字は次の如し

權 嘆 觀 難 劉 儀 羅 殺 戰 歲
僕 豐 國 與 好 娘 張 歸 辦 邊
協 過 時 陰 陽 儒 遠 園 還 懷

本字に見えた形を略字の形に改むるにはたくさんの例から推せば
ほゞそのきまりらしいものが見えるが少數のものは之を示しにく
い。しかし支那人は難書のものも多く之をヌの字で代用する。また殺
だの豊だの時だのと云ふやうな例で見える通りその一部分をとつて
他を棄てる方法もある。また戦だの僕だの遠だの園だのにあるやう
に同音の音符を之に入れかへることもある。又陰陽の二字の如く意

味から之を日月に配して改むる方法もある。また好娘張歸などの如
くその偏をリの字にしてしまふものもある。かくの如く色々の方法を
とつてつまりは略形に作り直しその簡易な形にて之を常々用ひよう
とするのである。これらは故意に改造したと云ふよりは自ら社會の
用途の上で頻繁に現はれるものは勢ひ略される傾きになると思はれ
る。かやうな結果出来て来る略字はなるべく之を擁護して之に正字
としての資格を與へてもよろしいのである。支那卑俗の小説類の版
に本は時に悪字もあれどもこの種の略字が多く見えてゐる。こは古
宋くあたりの小説類から胚胎してゐるやうである。

六 古代に現はれた略字

略字の顯著に見えてゐるものは宋元あたりから現代にかけての小

説類に多く在るのであるがしかしこれは今少しく古い時代にもないとは限らぬ。尤も後世のやうに豊から丰のみをとり與から与をとり又ヨを取る類の抜き取りかたは古いところにあまり見當らない。けれども思ひ切つて書を略すことは盛に行はれてゐる。例へば今より二千年前漢の隸書のうちにそれをたくさん見出す。即ち漢代略字の一斑

惠 靈 器 圖 圍 斷 嘉
存 左 憲 備 質 害 善
谷 虐 曹 龔

之に對する本字は次の定し

惠 靈 器 圖 圍 斷 嘉
存 在 憲 備 質 害 善
谷 虐 曹 龔

漢の隸書の略體は多く今日の略體の淵源をなしてゐるものが多いがこの類の省略法はいつの時代にも行はれる傾を有してゐるのである。もと漢の隸書と云ふものはそれよりも今一層古い時代なる秦の古隸（今より二千二百年前の書體）より崩れて生れ出たものである。而してその古隸は更に小篆から來てゐるものであつて小篆が煩繁で小面倒である爲め之を略書にして書き易くしたものを隸書と云ふのである。されば隸書は古隸にしても漢隸にしても、もとの形から

云ふとよほど略された形であると云ひ得る。(漢時代の書簡文字の筆蹟が近來支那西部砂漠地より發掘された木簡にあるのを見るがその材料によつて見ると極めて略式の文字が當時行はれてゐたことを見るのである。)

更に古く周時代に遡つて見ても當時の通用字には存外略字が多く行はれてゐた。盟の字を盟としたり、其の字を甘としたり、疆の字を暈としたりまた顯の字を暈としたりその他。陰を陰としたり爾を爾としたりまた老考をそれそれ老考としたるなど枚擧に遑のない位である。今の車の字の如きも周代にすでに現代式の簡單なものもあつたが極めて複雑なものもあつた。これは繁より簡にうつつたものと見られる。更に周以前の文字であると漁字などは魚が四つも書か

れ水流の象形も多いのであるがこれも簡易に改められて二匹か一匹の魚を書けばよろしいことになつた。

古代に現はれた略字の形は先づかくの如く後世のものとその軌を一にしてゐる。固より後世になると文字分岐の現象が他にあつて例へば郷の字から卿けいが出で又郷の形から別に饗けいだの、嚮けいだの、甕けいだのと云ふものが出てゐるやうに繁書のものも生じて來てゐることはある。しかし大體は古今を通じてその實際社會の方面には簡易なる形の方が本字よりも多く行はれてゐることは争はれぬのである。これが四書五經の如き謹嚴なる書物の版本及び鐘鼎類の如き壯嚴なるものの銘文その他後世の碑の本文の如き謹直なる文面などに窺はれてゐる正式の本字と相對峙して古來二大潮流を形成して行はれて來た

のである。

第二章 假名の起源

一 假名の出来た由來

假名はかなである。これは文字のうちでも支那傳來の漢字とちがひ最もたやすいものと見られてゐる。俗に文字と云へば假名を指し支那の漢字に對して呼べる語の如くに見られてゐる。しかし漢字そのものも、とさとして假名と呼ばれることがある。日本で上古奈良朝の時代に用ひられてゐた音のみを借りてゐた漢字は矢張り假名である。之を萬葉假名と云ふ。假名のうちでもこの萬葉假名のこととは別として、普通に謂つてゐる假名のことをここには主として述べる。

いろは及びアイウエオは日常何心なく之を最も容易に読み書きし、我國に於ける假名は朝鮮の諺文おんもんよりも覚え易いものとなつてゐる。言葉の聲を寫す音記號も假名の程度まで進めば母音の多い日本語などは最も譯なく綴ることが出来る。唯音聲の方から云つて羅馬字や諺文などのやうに統一的に寫聲法の出來てゐない點だけは致しかたがないがとにかく日本の假名は支那字中よりよくもここ迄發達せしめたものである。而して假名の漢字に優る最も著しい點として吾人は左の二點を擧げる。即ち

其の一 畫の齊一にして繁簡宜しきを得、概して簡便なること

其の二 個々の假名に全然何等の意味を含み居らざること

このうち畫の簡便であると云ふことは、その古く日本に傳來して

以來日本の社會で集大成された結果であることは無論である。然し云ふまでもなく假名はもと皆漢字から來てゐて而かも起源に遡ればその楷書體から出てゐる。けれども楷書からだんだん崩れて今の假名の形に成り齊うた迄の全徑路を擧げて悉く日本で行つた功績と見て了ふのは如何であらう。卑見によれば或る程度までは支那や朝鮮で培養されてゐたのではないか。所謂變體假名ハルカキを等ヒラキに於いて特に然るを覺ゆる次第である。實用向きに字形の崩されて行くことは支那、朝鮮に夙に行はれ、この大陸が出來た草書の餘波が日本に及びそれに一步を進めたものが假名を生んだ直接の母體であると思ふ。假名沿革の大要は大矢透氏の蒐集に係る沙門勝道歷山瑩玄珠碑外四十九種の資料によつて窺はれる。然し更に最近支那西部ロブ湖

畔樓蘭國故地より出土の漢簡策に見ゆる隸章(草)、また敦煌石室より發掘の六朝隋唐の章草經卷に見ゆる書體又ニヤ附近出土の六朝嫌帛に見ゆる草書、一として日本への文字傳來前大陸に草書略體使用の事實ありしことを告げてゐないものはない。論語や千字文に見る楷書體のもののみが傳へられ、草書の傳來は古來我國になかつたとは云へないのである。空海の草書を俟つ迄もなく夙に支那から種々の文書記録によつて楷書以外の書が我國に入つてゐたことは證明せられてゐる。これが日本に假名の出來る遠い原因となつてゐるのである。

假名成生の遠因はかくの如きところに存してゐる。空海が假名の發明者なりと云ふ如き俗説は今日では信ずるに足りない。文字は前

にも云つた通りその社會全使用者の上に生命を保持して行くものであるから、たとひ天子の力を以つてしても無理な文字を強ひることは出来ぬ。唐の則天武后が次の如き文字を制定して之を普及せしめようとしたことがあつたが今では「圈」の字の外は既にも云つたやうに死字となつてしまつた。

唐則天武后新字數例

	而	聖	王	𠄎	𠄎	季	𠄎
天	地	人	日	月	年	君	
臣	授	聖	初	國	萬		

(以下略之)

すべて文字は人為的に制定しても自然の傾向には勝てない。假名なども社會の自然的産物であつてこはもと知恩院、石山寺、東寺、西大寺、法隆寺、仁和寺、醍醐寺の資料によつて見ると天安、寛平天慶、天曆といふやうな頃即ち西紀第九世紀の半頃に始めて見えてゐる。而かも當時は既に大分略式のカナが出来てゐる。しかしその中にはまだ干、支、見、古、奈などの萬葉假名の名残が見える。然るにそれが其の後百年を経て第十世紀の半頃例へば長久、永承、天喜、康平、延久、承暦などと云ふ時代になると、ウには于とウとの兩方が出で支にはキの形が大分あらはれて來、見はミ又はみになり古は已又はコになり、奈は殆んどすべてナとなつて來た。かやうに

だんだん發達を遂げて行くうちづつと飛んで第十七世紀の初め即ち慶長、元和、寛永の頃になると殆んど今日のものに近くなり、たゞサに七(左)が時々現はれ又セにオが現はれる位のことにはあるが餘程整つて來た。ンは第十一世紀の頃に現はれて今に及んでゐる。假名發達の由來は大體かやうなわけで長い歴史の間に自然と生れ出たものである。自然手書運筆の便利に従ひ字が淘汰せられ、書が簡單化せられ遂に徳川期に入りて今日見るやうな最も進んだ假名(片假名)を見るに至つたのである。しかし更に望蜀の例に倣ひ一步を進めて云へばカ行には五にあたる共通のしるしを發達せしめサ行、タ行等以下同斷。すべてかくの如くなる時は朝鮮の諺文式又は羅馬字式のものになるわけである。これはそれ程まで音聲學的には行つてゐない

が、とにかく片假名まで進歩せしめて、實行に便じてゐると云ふことは、一は日本の國語の特質の然らしむる所とは云へ日本社會が過去の文字界に於いて成し遂げた非常なる功績と云はねばならぬ。今後更に之を進めて音聲學的に改良して行くかそれとも他の今一層便利な羅馬字を採るに至るか、但し今のまゝでゐるかこれは將來の社會に俟つべき國家重大の問題である。

二 假名の起源對照表

(イ) 假名の起源——一、片假名

いま現行片假名と及びこれに該當すべき原字とを對照して左に示す。

アイウエオ ㇿ(阿ㇿ) イ(伊) ウ(宇子) エ(江) オ(於(草書))

カ	キ	ク	ケ	コ	カ	キ	ク	ケ	コ
シ	シ	ス	セ	ソ	シ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト	タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ム	メ	モ		マ	ム	メ	モ	
ヤ	ユ	ヨ			ヤ	ユ	ヨ		
ラ	リ	ル	レ	ロ	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ	ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ

(ロ) 假名の起源一、平假名
 いろはに ぬ (以) ろ (呂) はと (波皮者) によ (仁丹)

ほ	ほ	へ	と	ち	ほ	ほ	へ	と	ち
り	り	ぬ	る	を	り	り	ぬ	る	を
わ	わ	か	よ	た	わ	わ	か	よ	た
れ	れ	そ	つ	ね	れ	れ	そ	つ	ね
な	な	ら	む	う	な	な	ら	む	う
ぬ	ぬ	の	お	く	ぬ	ぬ	の	お	く
や	や	ま	け	ふ	や	や	ま	け	ふ
こ	こ	え	て	あ	こ	こ	え	て	あ
さ	さ	き	ゆ	め	さ	さ	き	ゆ	め
み	み	し	え	ひ	み	み	し	え	ひ
も	も	せ	す		も	も	せ	す	

假名出生の由来はすべてそのもとの漢字の略形から来たものばかりではなく又その草書から来てゐるものもある。「リ」が利の字から出てゐることは明であるが「刀」の「リ」ではない。その沿革をしらべて見ると利の字全體の草書から来てゐるのである。「へ」が部のつくりの草書よりだんだん崩れて「マ」の字の如くなり更にその下の點が無くなつて「へ」の字となつたのである。「ら」が良の草書から来たり、「き」が幾の草書から来たり、「つ」が川より来たりその他「る」が留より、「わ」が和より、「れ」が於より、「の」が乃より、「こ」が己より、「え」が衣より来てゐるなど殆どすべて平假名の起りは、一つの漢字の全體が崩れて出来てゐる。唯例外は「へ」の字だけで、これは上述の如く部の字の省略形右半から来てゐるのである。片假名の方

は「リ」「へ」の如く平假名の形と同一のものもあるが全體から云ふと字形が違ひ且つその起りは多く漢字の一部分を切棄てた略形である。或は略形の草書體である。例外としては、ハマヤラワ、キニミキシツケセヘモヲぐらゐのもので普通は省きである。その省きは多く舊形の一部分で偏なり旁なり冠なりを崩さずに現はしてゐるのである。即ち

カ(加)、タ(多)、イ(伊)、ウ(宇)、ク(久)、ヌ(奴)、フ(不)、ム(牟)、エ(江)、ネ(祢)、レ(礼)、オ(於)、コ(己)、ソ(曾)、ノ(乃)、ホ(保)、ヨ(與)、ロ(呂)、 * 注意、祢の偏示はネとなり曾の頭はソとなること何れも手書體に見らる。

かやうに現行假名の源はそれぞれ明亮に推定することが出来る。

しかしこれはきまつてしまつた後から唯もとに遡る丈のことで、その系統上カより加を、タより多を推すことが出来る。けれどもその原字は前初から一つに定まつてゐたものではない。加に對しては可があり、之に對しては志があり、乃に對して能があり、安に對して阿があつた。又奈は下半の示のみでオにあつたこともあり須は右半の頁でスにあてたこともあつた。平假名のちは知から來てゐるが片假名のチは矢のみから來てゐる。かやうに本來假名は混沌たる状態であつた。その同一の音に對して色々の漢字が用ひられてゐたのは所謂萬葉假名の名残りである。色々の萬葉假名のうちに淘汰が行はれその比較的度數の多く使用せられてゐたものから上述二様の方法によつて今日の假名が生れ出たのである。

第三章 文字構造の意匠

一 倉韻は人に非ず

文字の始めを説くもの必ず倉韻くらげつのことを述べ、倉韻が文字を創造したものだと言つてゐる。日本では後世に傳來した朝鮮の諺文を日よみ文とあがめ尊重してゐる類を見ても判るやうに文字は神の作り成せるもの、天上より下し賜はつたものなりなどと云ふ神秘的の説明をつける傾がある。北海道アイノ人の如き全然その文字なき種族に於いてさへその文字を持たぬに就いての美しき神話を發生してゐる。總じて文字は思想の純樸な種族には靈妙な力の存する如く想像せらるゝの餘り世界諸地方に文字神話が美しく生れ出でゝゐる。此れに

よつて見ると支那の如き文字に豊かな國では定めし文字神話の發達してゐることであらうとは誰しも推測する所なるが事實は然らず。たゞ上古の傳説に黃帝の史官に倉頡と云ふものがあり、鳥や獸の足迹にそれそれ相違のあることを知り、初めて文字（もと書契と云ふ）を作つたのだと云つてゐたり、又その前に庖犧氏や神農氏と云ふがあつて結繩、治を爲し其の事を統ぶと云つてゐる。その上古の結繩が後世聖人によつて書契と改められたのだと見てゐるのであつて一種の文字傳説に過ぎぬ。倉頡は一に蒼頡とも書かれてゐるが言葉の音からすると創契であるべきで、文字を創造したと云ふ。つまり書契始めの時代を擬人化して傳説に作つたものに過ぎぬ。傳説としての形式を具へるやうにする爲め便宜上倉頡と云ふ人間を最初に立てたものと見られる。獨り倉頡のみならず神農氏にしても又燧人氏にしても、それぞれ唯文化史發達上の古代の時期を擬人化してかやうに呼んだものに過ぎぬ。されば倉頡の傳説は文字古傳説の出發點をなすものであるが兎に角上代社會の文化の末だ混沌たる時代を脱せなかつた頃の文字胚胎期を稱してかやうに見たものである。されば上代社會の全體が倉頡即ち創契者であるべきは見易きの理である。従つて倉頡の初めて作つたと稱せらるゝ象形の文や又その複合體の字などと云ふやうなものも上代の社會の間に自ら發生して來た自然的共産物と云つても過言でないのである。

文字の出來かたに就いては從來學者或は説をなして上述倉頡が最初計畫を立て、構造の方法を組んだものだと云ふことを信じてゐる

ものがあるがそれは矢張り社會關係から説くべきであると考へる。象形、指事、會意、「諧聲、轉注假借の如き六書の法に於いてもこれは後世の研究者が研究調査の便宜上立てた分類法に過ぎぬものである。然るを最初から倉頡自身が一人で設計したもののやうに見るのは如何かと思ふ。法律の制定の如きものに就いて見てもその法典編纂のことは一個人の力で成ることはあるが法律そのものの精神、源泉は一人の思考によつて案出せらる可きものでない。これは理窟はさて置きその土地の不文律なる習慣國民性を基礎として立てられなくてはならぬ。若し此れを無視して法律を編むことありとせんか、その法律はその社會に全く容れられない空文となるのである。その社會が長い歴史の間に自ら生み出した國民性なり習慣なりはこの上

なき權威を有してゐる。文字の如きも法律とその生成の基礎に於いては同じことで飽く迄も社會そのものに地盤を有してゐるものであつて、一個人の力で設計されたやうな理論的産物ではない。つまり社會が長い習慣の間に作りなしたる普遍的の共産物であるから倉頡説は今日之を認むるの價値がないのである。

二 所謂六書の解釋

六書とは下に述べる所の文字構造法の四種とその運用法の二種類とを併稱したものである。文字構造の方法と云ふものは最初にその規則が設けられてその規則に合はせて總べての文字が作られたと云ふやうに見て茲に之を解釋しやうとするものではない。古來社會の人々は色々勝手に都合のよい便利な文字を造る。その出來揚つた文

字から云ふと千差萬別であるが、その出来かたを蒐集分類して見るとこれが四種類にまとめられる故、四種の構造法があると云ふに過ぎぬ。さればこれは勿論後世から云ふことである。古聖人が居て四種の造字法を案出したやうに見えるものがあるのは非常な誤りである。文字は常に一般世俗の間に生れその社會に培養せられるものである故その社會の人々すべてに適切に知れてゐるものでなくてはならぬ。世俗一般の人々が智識階級の人の知つてゐるやうな後世の文字上の規則を辨へてゐると云ふやうなことはいつの時代にも有り得べからざることである。人偏の俥(人力車)の字も出来れば、女偏の婿と云ふ字も出来る。ブリキの函の罐の字も出来る。世俗に作る文字と云ふものは此の類である。ところが古のことを云ふと俥だの、

婿だの、罐だのと云ふやうな形の文字はなかつた。もとは車、婿(士に胥)、罐(缶に灌)であつたと云ふやうなわけである。字の胚胎出發は世俗にある。その代り字を破壊し、混亂して行くのも亦世俗にある。此の故に世俗は滔々たる勢を以つて字を作ることは作る。しかし規則方法と考へてそれに合はして作ると云ふ如きことは斷じてないのである。今左に文字構造法の四種類に就いて述べる。

その一 象形

古來文字の出来かたは今更云ふまでもなく、天界地界に見るものうちその最も普通に多く見るもの奇異に感ずるもの等の形にかたどつて作ることがその最初の方法となつてゐる。山を見、川を見、雨を見、虎を見、豕を見、人を見る、その見る所のものをそのまゝ

形に象かたどつて現はさうとする。これは、文字の出来始めの出発点である。これを文字構造の上で象形と云ふのである。

その二 指事

象形は文字の初めであるが然しこれのみが文字の出発点でない。一とか二とか三と云ふ数の感念を示す文字は口なり叩なり品なり又は一なり二なり三なり何とか記號を以つて之を示す方法が立てられなくては忽ち毎日のとに困る。結繩の方法を相並んで此の數字の發生は必ず早くからなくてはなるまい。又多少であるとか上下であるとか彼此であるとか大小であるとか此の類の感念を示す文字も亦實際生活の必要上早く作られなくてはならぬ。又既に象形をして出來てゐる文字で例へば刀なら刀をとり、その刀のハを示すに何とか符號

を加へる必要の起ることがある。その時は刀の切れる方の刃の側に點を打つてかやうに刃とする。又皿にノを加へて血とする。これらは全く皆記號的である。社會の人々同志の間に約束があつてその約束の下に理解されてゐる記號を用ふるの方法である。山なり、川流なり、馬なり、すべてのその象形文字であるときは約束がなくともその形からすぐその意の大體を知ることが出来る。之に反して一二三の如き記號的のものは本來その據るべき特別の象形はなく單に備忘の爲め又は特別の意味を示す爲めの記號であつてその何の事であるかを指示してゐると云ふ意味で之を指事と云ひ文字構造上第一位に數へられてゐる。之は場合が少ないやうに見られるが實際は上代の文字法に甚だ多く見出される。白なら白の字を採つて考へて見るに白は

もと白玉で寶珠の玉の如き形にかゝれてゐる。之が伯爵の伯の符號として用ひられてゐた爲め上代の伯はみな白と書かれてゐる。それが後にイ偏をとつて伯となつた。白がその伯の符號として用ひられてゐたのは指事である。同じく玉の古字の王が君王の符號に用ひられ、敕だの勅だの諫だのとある東東が上古君長の符號に用ひられてゐるなども固より指事である。その他口が命令とか宣告とかの符號となり、鞭をもてる又(手)が權利の符號となり、支の字參照。足が正義の感念の符號となり、正の字參照。目が首の符號となり、首が人の符號となるなどその類例は甚だ多い。これらは多く複合字を作るときに現はれて來るのでも判る通り形の上で見られる意味以外に別の意味のあることを示してゐるのである。

その三 會意

會意とは甲乙兩字を合して丙と云ふ意味を新たに作る方法のものを指す。十の字を二つ合せて廿の字を作り、三つ合せて卅となす如き、又辰と寸とで辱の字を作り、木と目とで相の字を作り、尹と口とで君の字を作り、日と𠂔くまとで莫(暮)の字を作り、囙まじと月とで明の字を成し、人と口とで信(もと仰)の字を成すなどすべてこれらは會意である。人の正面向きに立つてゐる立の字は古は位の義をとつてゐるがその立の字を二つならべた竝はナラブの義を會意してゐる。その他鼎と刀とで則の字をなし、𡇗と女とで安の字をなすなども此の部類中に入る。又人二人で从(從)の字となり、三人で叒(衆)の字となり、その二人のときでもせなか合はせの時北(背)の字となり

右向きときは比の字となる。後世の楷書殊に活字の形などでは之を十分明にしがたきもその古代形に遡つて見るときは人の姿、家の形、窓の形、鼎の形、刀の形、何れもみな歴然と肯首させることが出来るのである。

會意字には會意の一方に音を示す役目の要素のあることが多い。例へば門は門と口とで出來同時に門はその音符ともなつてゐる。牝(牧)は牛と支とで成り支はその音を示してゐる。祖は且(墓)と示とより成り且はその音符となつてゐる。かやうに會意に諧聲を兼ねたものがあることは注意すべきことである。

その四 諧聲

諧聲の文字は上述會意字と同じく複合體をなすものであるがその

要素の一方が必ず音符となつてゐることを條件とするものである。横濱、廣島、敦賀、新潟、權利、義務等の諧字は何れもその要素中にそれぞれその音符黄、賓、鳥等を含んでゐる故これらは何れも諧聲字である。同様に國邦、都郡、町村府縣、字、政治等の文字も亦この種に屬する。頭顱髭鬚の豆、桑、此、須は即ちそれぞれその合體字の音符である。かやうに音符のある文字をすべて稱して諧聲文字となすのである。されば普通合體字として知られたる文字は大抵この諧聲字に屬してゐる。尤も古來音の變化によつて一見音符の音とその字の音に一致しないやうに見えるものもあるがそれらはその沿革に遡れば直ちに判ることである。裔に於ける衣、哀に於ける衣、衰に於ける衣の如き又俗、浴峪に於ける谷の如きその單獨のと

きの音とは著しき相違ありとは云へその音符たることは間違ひないのである。さればこれらの音符を含めるものはすべて所謂諧聲文字であるのである。時にその音符が變形し又は同音の他の音符でおき代へられてゐること、僊と仙、擔と担との如きものもある。或は尋より彡が省かれて尋となり、津より彡が省かれて津となつてゐると云ふやうに音符の後世省略されて了つたものもある。かやうなものでも矢張り諧聲字たるには相違ないのである。されば今日諧聲の姿で見られてゐないからと云つて直ちに之を諧聲に非ずと云ふことは云へない。聽の字などの如きは廷、呈と同類の王ていの音符によれる文字なるが普通には之を省いて耳偏のみに書かれてゐる。従つて應の字に於いては聽が音符の單位となつてゐるのであるから少しぐらゐ

その要素に缺くる所があつても差支なくよまれてゐる。が本來を云へば音符の存するが正當である。

音符には複雑なものもあれば簡單なものもある、上述聽の字の如きは複雑な方の例である。僊、擔、勵の音符がそれぞれ山、且、万でおき代へられてゐるのはその簡單なものに就かんとする傾を示せるものである。音符の最も簡略なのは、(チユの音)である。主の字にシユの音のあるはこの音符がある爲めである。されば主の字は勿論諧聲字たるに相違ない。更に主が音符の單位となつて注柱註の諧聲の字を作つてゐるのである。尙音符所在の位置に就いては都郡の如く左にあることあり、祖婚の如く右なることあり、忘、惡、裔の如く上なるあり、呈、鬚、屬の如く下なるあり、哀、悶、鹽(鹽を

音符とすの如く外なるあり、固、國、圍の如く内なるあり、色々
のところに這入つてゐるが兎に角音符のあるものは諧聲字と呼ぶので
ある。

以上四種類は何れも字形構造の方法に就いて觀らるゝ定則である。この外に尙造字上に方法があつたかも知れぬが今日までのところでは大抵このうちの何れかに屬せしむることが出来る。但し字源の明でない爲め果して象形なのか指事なのか、又會意のみの構造なのか但しは諧聲までをも含めて造られてゐるのか十分わからぬものがある。實際古代文字を扱つて見ると意外にその構造字形の判然と見えては居てもその意匠の工合がわからぬものが多いことに氣附くのである。

次ぎには既に出來た文字の運用法の上にて二種の場合のあることを述べる。これは轉注と假借と云ふ名で今迄呼ばれてゐるものである。これを古來造字法の中に入れて考へてゐたのはよろしくない。文字はこの法によつて新造されてゐるわけでない。たゞこの方法によつて文字の用途が増したと云ふ丈のことである。

その五 轉注

轉注は古來六書説のうちでも最も議論があり今に決定せられてゐない。しかし轉注とはもと意義變化の現象あるを指すもので老ならば老にしてもその原義のまゝでいつまでも用ひられるものでなく時には老練の老の如き轉義をとることがある。目と云つても首にもなれば人にもなり條項にもなり見ることもなり色々變はる。金

と云つても、もとは銅を主として指し鐵之に次ぎ後には一般の金屬を指し又特に黄金を指すやうにもなつた。その他友の字にしても頭の字にしても又口の字にしてもその轉義の方で用ひられてゐることは甚だ多い、かやうに文字に轉義が出来る爲めに新しい文字を造らなくてもすむことになり、字數の爲めには經濟的である。しかし字義の増加の爲めに益複雑を來たすことになる。轉義の生ずるわけは多くはその意味の聯想によるもので頭と云へば長、首腦、を指すことになり、又、手と云へば取ること、活動すること、權力を振ふこと、掌ること授けることと云ふ類の意味が出で、貝と云へば財貨、富貴が聯想されてゐる。又槐と云へば大臣のことになり牛(羊豕)と云へば御馳走(大牢小牢)のこと又性全航のことなり楹と云へば兩

楹のことが考へだされてゐる。かくの如くして本來の意味が少しづつ轉ずる。老人はよく考慮するの義より老が案ずるの意を胚胎した如き例も面白い。されば轉注とは意義の分岐を指すものである。あらゆる漢字にはこれがある。一の字にしてもハジメとをカズとか云ふ轉義の起つてゐる位ですべて義を變化させて他に轉用することを轉注と云ふのである。

その六 假借

假借とは他の字の音をかりて用ひること今マメの義の豆の字に就いて見るには始の籩豆(器物)の豆であつて菽の義はなかつた。しかるに菽の字と同じ古音を有してゐた爲め豆の字をかり用ひることが始まり之をマメの音にあてた。又ナガシと云ふことをチャ

ン(チャウ)と云ふもその文字がない。爲めに同音である所の長幼の長の字をかりてその同音の故に長の字でナガキことを示すことにした。即ち假り字である。萬はもと蟲の名であつて數字ではない。ただ同音である爲めに之を數字に充てたまでである。五六七八九十も亦同じく、何れも假り字である。フランスに佛蘭西を充てギリシヤに希臘を、ヒマラヤに喜馬拉耶をあてたる何れもこの假借の精神に一致してゐる。ジャバングに日本を充てカオリに高麗をあてカムチヤツカに甘察加をあてたるも亦皆假借である。


文字構造の意匠は上述六書の方法に分類して考へることが出来る。そのうち轉注と假借の二方法は既に出来てゐる文字の意義と音とを色々の場合に轉用する方法である故これによつて字數の新增を

防ぐことが出来る。在來の文字で新しい場合に合はせて行くことの出来、所謂融通がつくのであるから此の轉注假借の二方法は文字の運用發達上には缺く可からざるものである。同一の文字に數義出来るのは煩に堪へぬがこれは文字として致しかたがない。その新概念に對して一々新しい字の作られる手數に比ぶる時は何れが實際問題として煩しいか。上古以來各時代に出來た文字で後世に傳はらないものがどれ位澤山あるか知れぬ。周代の文字で秦漢に傳はらず死字となつてしまつたものがどつさりある。又殷代の文字で周に逸したものも甚だたくさん見出される。それから各時代の所謂古字逸文を算し來たれば古來構成された文字の數は字典に網羅されてゐるものに倍し十萬位はあるかと思ふ。同一字の意義は三様四様に分岐

し又同一字の音は色々の場合に轉用せらるるとありとするも、これは寧ろ無數の文字が續々新生するに比すれば遙によろしい。時代に必要な文字が出来ることは止むを得ぬがなる可くこれ以上増加させたくない。その代り二字語三字語と云ふ熟語によつて新概念を表はすの方法があるのであるからその方法に據るを可とする。嘗に文字は増加を防ぐ必要のあるばかりでなく寧ろできる丈畧字にして煩を少なくするやうに導く可きものと考へる。

文字の構成で最も留意すべきは指事法である。同じ圓を描いても時代によつてその指す所のものゝ意味が同一でない。日本で今日○ウイ物と云へば貨幣を意味するとなつてゐるが、支那では古、貨幣を意味するものには貝を書いてゐた。貝は之を魚貝の貝の義に用ひると

きはその象形法に屬すべきものとして認むべきも若し財貨の意味に用ひるならば、指事法に屬する。指事法から云ふと貨幣財寶のしるしに貝の象を假りに來たに過ぎぬのである。○を書いても同様である。何かその當時に意味したものを指事せしめてその意味を約束的に認めておればよろしいのである。若しこれが數の示す丈のものなれば○一つは一の字にあたり○二つは二の字にあたるわけである。員數の員の字がもと○と貝との合字なるは貝一つの意から出來てゐるものらしい。然るに又○は太陽のしるしにもなつて居る。その時には中央に點を打つ。即つ○である。○は太陽に對する指事であると言ひ得られる。圓形は色々の場合に使用せらるゝものなれども特に或る約束の下に○は日輪の義なりと定むる。又その下に

しるしを附して  とすれば且の字の古形となる。何れも指事法によれるものである。文字の構成法中この指事の點は最も不明瞭であり且つ從來唯指事の例としては上下の二字ぐらゐで十分徹底してゐなかつた所がある故こゝに特に之を辨じておく。

第四章 支那文字の西方記源説

一 説文セツモンと鐘鼎文及び龜版文

日本の假名は大陸の支那文字から來てゐるし、朝鮮の諺文は印度の梵字から來てゐるし、また安南の安南文字は支那から來てゐる。然らば支那の文字はどこから來たか。支那特發のものであるか、それとも他から傳來されたものであるか。この點は議論としても面白い

問題であるが又事實の研究としても頗る興味のある問題である。今から約一千八百年前支那後漢の建光元年に出來た許慎著、説文解字は支那文字學上の最初の寶典として重んぜられてゐる書物であるが、この書物によると、當時知られてゐなかつたものは別として當時通用の文字九千三百五十三字と云ふものが網羅されてゐる。天地、鬼神、山川、草木、鳥獸、蟲魚、奇怪、王制、禮儀、人事、雜物の各方面に亘り集められてゐる。當時は後世のやうに未だ多くの文字が出來てゐなかつたので、喫だの些だの售だの、また蹉、跎、蹙、芙、蔬、藏、その他珈カ（もと婦人の首飾の玉）、珮ヘイ（珠五百枚）、祆ケン（ケン、ネストリア教の神）の如き文字は本文に載つてゐない。しかし上氏の字のみを見るには便利な書物である。尤も上代の文字と云つ

ても之に不載のもの即ち古字逸文と稱せらるゝものもよほどある。更に根本をしらべるには説文を脱却して周代の古銅器即ち鐘鼎尊彝の古器類の銘並に古璽文、古陶印などに遡らなくてはならぬ。殊に古銅器類には説文にない文字や説文にあつてもその書體のよほど古い體が発見せられる。それ故古銅器の銘を見れば後世の慣用によつて變化せられてゐるやうなものでなく古代式そのまゝの文字に接することが出来るのである。古銅器の文字は勿論當時は文字學上の手掛りを後世に知らしむる爲めに記されたものではない。實用上の目的で當時(周代)の文章を銘々記したものである。しかし之を後世から見ると説文以上に貴重な資料となるのである。

古銅器に見ゆる文字の記された由來をしらべて見ると、當時約束



の締結せられた時又は武勳によりて下賜ありたる時その他國の掟の條文を示す時などに鑄銘又は鑿銘の方法によつて之に文字を記したものである。その文章の古雅なる丈それ丈また文字の形そのものも頗る奇古である。説文は小篆の如く圖案的に變化してはゐないで支那文字本來の面目をよく現はしてゐるものが多い。

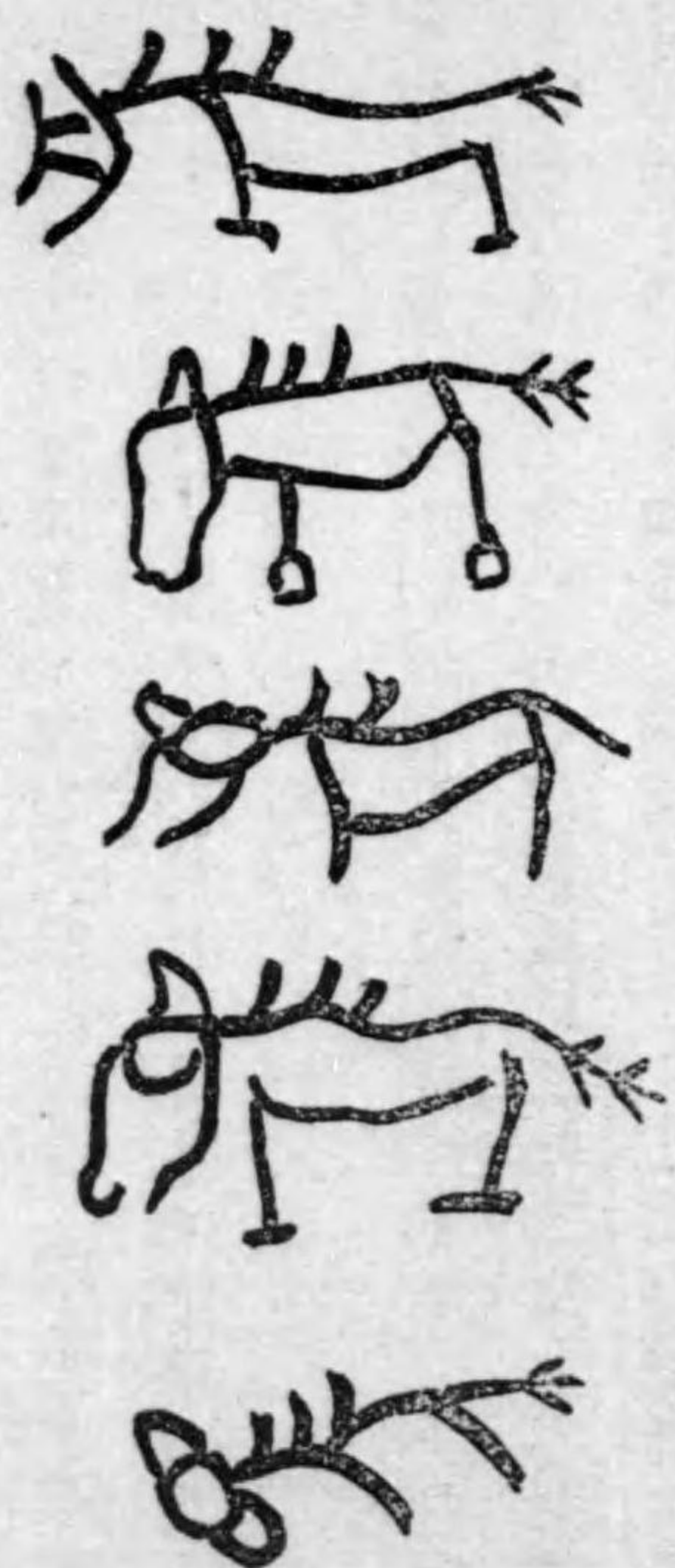
説文の文字及び古銅器の文字はその時代の推移に伴ふ形の上に變化はあるが、然し如何にも支那式である。支那人の雕琢の美を好む嗜好や形式に泥む國民性が如何にもよく現はれてゐる。此れに西方諸國の文字の傳來として認む可き形迹のありや否やは大に攷究を要する問題なるが未だ之にかくの如き要素なり書き方なりの存するものとして認めらるべき手掛かりは見出さない。次ぎに然らば、今少

しく古に遡つて殷代の文字と稱せらるゝ龜卜用の文字、龜甲獸骨に刻せられたる上古式の文字に此れありや否や。此の方面の特別研究は未だ研究の緒につかない今日何とも云ひ兼ねるが是れ迄の一般的研究の上ではこれ亦西方の楔形文字などに連絡する類の現象はない。又之にその痕迹として認む可きものも未だ見出さないのである。

龜甲獸骨に見ゆる上古式の文字は刻文である。一種銳利なる小刀を以て刻したものであつてその現はれてゐる文字の形は微細な點まで寫生的に示されてゐる。動物で馬ならば馬の字を示すには鼠毛、豐尾、足蹄に至るまでを描寫し、鹿ならば、その長脚、角の歧までをも明示してゐる。今これら上古式の文字を示す爲め馬、鹿、虎、

羊の四種のを左に列擧する。

一、支那上古式馬の字(龜甲獸骨文)



馬の形態上の特色を描寫せる點に注意すべし。文字

として元始的のところ多きを見る。

二、支那上古式鹿の字(龜甲獸骨文)

鹿の角は三歧のものを常に描寫し他種のものには形に象れるもの未



だ見ず。その最も普通のものをも以つて他に轉用することありしなるべし。又時に牝鹿の無角なるものを描寫せられたるあり。今之を略す。

三 支那上古式羊の字(龜甲獸骨文)



1



2



3



4



5



6

羊の字は後世羊の角及び首のみを以つてその羊の象形となしてゐたれども本来その體軀を描寫せる文字あることは此の龜甲文の示せる如し。上圖1參照。尙上圖2に示せるものは寬の字に見ゆるウ冠以外の部分なり。もと羊の象形に出づ。3 4 5はその首部のみをとりたるものなりとす。

四 支那上古式虎の字(龜甲獸骨文)

虎斑と長尾を示す。されどこのうちには猫族の他の獸を示せるも

のあるに似たり。要はこの一斑を擧ぐるに止むるのみ。



今これ等の文字の刻されてゐる實況につきその實際獸骨龜甲に
かに刻されてゐるかを示すときは左の如き手法に成れるを見る。即
ち

譯文

貞 鼠(?) 丁酉

俎 于 鹿

占曰其之(下闕)



このうち二行目の三字目鹿の字に留意せらるべし。又他の獸骨遺片に就いて一般の刻文の状況を見るに左の如きものがある。



譯文	貞	今	丑	其	今	丙	貞	不
	丙	午	之	ト	午	不	其	月
	征	雨			其	征	雨	

右のうち貞の字、今の字、丙の字、午の字、其の字、雨の字は何れも元始的の形である。元始的の文字は今日讀めないのが多い。夙にその當時限りで死字となつてゐるものもあり、死字となつてゐなくとも判讀の出来ぬものもある。

要するに支那の上古の文字は上に擧げたやうな形にて現はれてゐるのである。此れは何れも象形的性質を具備しその繪畫的なる所は最も明白に現はれてゐるのである。支那字の根本がかくの如きものであることを知つておくはこの起源を考ふる上に一つの基礎感念を抱かしむる上に必要なことである。



二 支那文字西方起源説の由來

支那の文字が外國よりの傳來物であると云ふ説がある。がかやう

な思想は支那人自身から唱導されるわけではない。古來自ら尊大なる態度で中國又は中華の國となしてゐる漢民族が、その最も尊重せる文字の源流が外族から出てゐるなど云ふことは決して支那流の考へかたでは出て來ないのである。由來支那文明は時に世界文化の泉源を以つて知られ漢代西域の疏勒國の名によつてシルク(Silk 絹絲)の音が歐亞並に世界に傳播し、又茶の音によつて茶が歐亞並に世界に出てゐることも知られてゐる。その他火薬にせよ、印刷のことにせよ、文化の方向で支那が世界文明にその最初の曙光を放つてゐる點は少くない。

然るに支那の文字はもと外國より傳來したりしものなりと云ふは甚だ突飛なるの感がある。この説をなし始めたものは西人である。

西洋の東洋學者中にはまゝ此の説をひろき古代文明の比較研究から推論して唱へる傾向がある。日本にも此の説を信ぜるものがある。西人で此のことを早く唱へ出したのは佛蘭西の東洋學者、テリアン・ル・ラ・クウペリ氏である。氏の説によると支那文明は支那人の到底創建し得べきものにあらず。支那民族はたゞ之を外國より傳來したものを受け入れたに過ぎぬ。元來支那文明は最初、天文、曆數などを始め文化各般のものは今日のアラビア國、ユウフラチス、チゲリスの兩河の流域に上古(今より四五千年前)國をなしてゐたアッシリア・バビロニアの文化が東漸した結果に過ぎぬのである。黃帝時代の文明と云ふものは即ちアッシリア方面の文化の餘波に過ぎぬ。もとアッシリアのバク Bak 族が東漸して來た時高度の文明をもた

らして支那に這入つたそのおかげで上古の支那には天文の智識でもあれ程までに進んでゐるのである。文字も亦然りて支那の頭腦を以つてしてはこれ程までに發達せしむることはできなかつたのである。山の字  の如きを見てもバビロン文字たることを知るのである。山の字  あると云ふやうに見てゐる。ラ・クウベリ著「支那の古文の」民族以前の支那文明」參照。此の説が一度出て以來古代文明に興味をもつものでラ氏の説を是認せんとするものが續々出て來てゐる。現にポール氏の如きはその一例で有名な學者である。その結論は兎に角として觀察法と着眼點の面白い點で必しも一笑に付すべきものではない。日本にも此の説は相當の價を認められてゐる。

由來支那文明の起源、支那人種の發源は遼遠にしてこれを明にす

ること甚だ困難なる爲めか斷案を下してその明快なる學説を唱ふものは未だ出てゐないやうに思はれる。今文字に就いてアッシリア・バビロニアの字形如何と云ふには後章に示すやうに楔形組織である。所謂キューネ、フオーム Cuneiform である。楔形の線を幾つか組合はして構成せられてゐる。その字形は全體として支那のそれに似てゐる所がないのみならず、一つの線は表はしかたにしても支那のものとは全く違つてゐる。これは固より刻する所の文房具の違ひにもよるし又その表はす所のものが皮なり骨なり竹なり泥なり、葉なりによつても違つて來る。何れにせよ支那にはその上古式の文字即ち龜甲獸骨の文字には固より鐘鼎文などは山の字の外にはその楔形のもの未だ發見されないのである。強いて若し多くの楔形の

ものを見出さうとすれば後漢時代に入つての説文解字中まゝ古文體として擧げられたものに之に似たものがある位である。その形は全部が楔形で出来てゐるのではなくして唯一部分にその三角形の線が見出されてゐるのである。即ちその一例を左に示す。



雷の字



殿の字



陽の字

この類の字形は字義及び構造法まで一括して之に該當すべきものをアッシリア方向に見出すとが出来れば甚だ注目すべき値ある問題なるも、事實に於いてはたゞその三角形の線が偶然似寄つてゐると云ふ丈である。若しこの三角形が龜甲文なり鍾鼎文なり上代文字に

現はれてゐると云ふことである時は多少の關係を疑ふ緒ともなり得べけれども唯説文にある丈では有力な材料とはなりにくい。説文に示せる古文の三角形を有するものはその如何なる典據によりて採りたるものなるか。之を詳にしないがその形の絶えて上代文に見出されない事實によつて考へると此の字形が格別西方起源説を解く關鍵とならないことは論ずるまでもないことである。

第五章

アッシリア・バビロニア文字

一 楔形(くさびがた)文字

西部亞細亞で今の亞拉非亞チグリス・ユーフラティス河の流域に今より四千百餘年前(西曆紀元前二千二百五十年の頃)既に立派な

文明があり、又その文明を背景としてゐる文字の行はれてゐたことが史跡遺物の研究せられてゐる。その文字はキューネイフォーム (Cuneiform) 文字で譯して楔形文字と云ふのである。この文字の発見は今を距ること約四十一年前即ち千八百七十四年に英人のジョージ・スミスガニネベとバビロンと遺迹を發掘して、たくさんの粘土板の記録を獲たのに端緒を發してゐるのである。その文字の研究はマイスネル博士その他のアッシリア學者によつて試みられ發表せられその實物は、大英博物館に陳列せられた。その研究の結果はアピロニア王統の初期のものであらうと云ふことになつてゐたが一千八百九十八年になつてデリッチ博士 (Dr. Delitsch) は之をバビロン建國第一期時代の英主ハムラビ王當時の法律を集めた編纂物であると

云ふ推測説を出し、その後まもなくその推測説は確かめられた。ハムラビ王 (Hammurabi) とは普通の呼びかたであるが實際は Chammurabi, Khammurabi, Ammurabi, Ammurpi, など色々の呼びかたがある。そのハムラビ法典は大部分圓形石柱の両面に雕刻せられてあるのである。さてこのバビロン帝國と云ふは最初の王をサルゴン (Sargon of Agade) と云ひその時代に既に高度の文明を持つてゐたのである。その刻文の研究によつて見るとサルゴン王はもとセミティック (Semitic) 族であつて、ごく古い時代に西の方から移つて來た、そのときたくさんの移住民を伴つて來たのであるが、當時更に他の古い移住民と接觸し混居してゐた。そして高度の文明を他から入れて上代に一大光明を放つてゐたのである。楔形文字の如きもそ

のうちの一である。始め楔形文字は之をスメル (Sumerian) と云へる種族より學びそのスメル人の楔形組織を自國に受入れ、自分共の要求する所に合ふやうに變へて使用した。嘗に文字のみに非ず、言語も亦之と共に入れられた。これは宛も支那文字の日本に傳來された當時それ漢語が伴つて這入つて來たのと同じわけである。バビロンでは爲めに言語上はセミティック語とスメル語との兩者が併行して使はれてゐた。そしてその間の時代は随分長かつたから一が他に互に影響をして來た結果、外來語は漸次増加して來た。しかし最後にセミティック語がやはり標準語として用ひられるやうになり文章語や刻文の上にはスメル語がその生命を保つてゐたのである。古代バビロンはその後外敵の侵入を受け、今より三千七百年前即

ち西紀一八〇〇年前には國の北部に追ひ詰められ、次いで國內にアッシリア國が分離して立つに至つた。西紀前六〇六年の頃にはアッシリア王のナボポラニアがその隆々たる勢力を以て遂に新バビロニア國を立つるに至つた。有名なネブカドネザル王はその次の王である。その頃の文字も無論楔形文字を襲用してゐた。しかし古より長い間の使用と、その使用者の簡便を貴ぶの精神とにより、だんだん變化して來て遂にはよほど違つたものとなつた。新バビロニアの文字は概して簡略なる楔形である。之をアッシリア文字に比する時は大體似てゐるやうに思はれるが、然しまた相違せるものも少なくない。更にアッシリア文字を採つて之を古代バビロンの文字に比較する時はその差は非常である。宛も東洋で假名を龜版文か鐘鼎文かに比較

したやうなものである。東洋に於いてはその文字の系統を明にする
とが出来ることがアッシリア文字に於いては必しも悉く之を闡明ならし
むることは出来ないやうに思はれる。或は古代形と後世のものとの
間には何か一定の關係があるかも知れぬが、未だその間の系統を釋
然たらしむる迄には至つてゐない。

いま古代バビロニアの文字中より五六の例をとりてその形がアッ
シリア及び新バビロニアに於いては如何に變化してゐるかを研究し
て見るに、その間に著しい類似は固より見出されぬが然し何とな
く一種の系統の辿られるものゝあるとがわかる。左に一、神の字、
二、王の字、三、日の字、四、門の字、五、家の字、六、月の字に就
いてこの起源より末葉に至る形を比較對照して見よう。

古代バビロニア文字

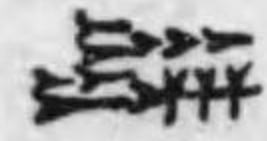
アッシリア文字

新バビロニア文字

一、神の字(星の形)



二、王の字(刀の形)



三、日の字(一日二日等)



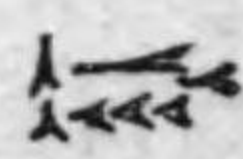
四、門の字(入口)



五、家の字



六、月の字(一月二月等)



これら字形變化の表は後世のアッシリア文字及び新バビロニア文字のみでは容易にそのもとの形を探ることの出来ないことを告げてゐるのである。而してそのうちの原形たる位置にある文字例へば神の字(星の形)にしてもこれが果して本來より神の義で出来てゐたかと云ふに、然らず、ヌメル時代の原始的意味は天(Heaven)のことを指して之をアン(𐎠)と云つてゐたのである。天にしても神にして

も此の字形の指示する所は象形で之を示してゐるのでなく、一種のシンボル(表識)として之を示してゐるのである。支那では天のことを人の大字なりの形を書いて之を示してゐるが、こは假借である。テンと云ふ語の音を示す爲めに天の字をかりた丈のことで、本來天の字のうちに天空そのものを指示する要素があるのではない。星形を書いて天の意味を現はした例は支那には見ない。又神の字は支那ではもと雷電の象を示した圖を書き之れに祭祀のシンボルである示の字を加へたものに過ぎぬ。未だ古代バビロニア式の星形を書いて之を示した證據は見當らない。未だこれが見當らないからと云つて必しも古に兩者の關係がなかつたとは断定せぬ。あつたかも知れぬ。然しあらゆる方面から科學的材料、手掛りとなるものが未だ

出て来ぬと云ふことを附言しておく。

二 楔形文字の見えてゐる資料

アッシリア・バビロニア文字はかくの如くその意味もその形も其の起源以來その年代の推移と共に種々の變化を経て來てゐる。しかしその最初の出發點が繪から出てゐることはこれによつて推測される。而かも繪文字なるものは、獨り星形や刀形のみに限らず、鳥の形もある。水の形もある。總べて此の式の象形又は象形的のものゝ多かつたことは争はれまい。後のバビロン文字になると、殆んど支那の楷書又は草書の如くになつてその本來の形からは、よほど違つて來てゐるが、若しそのものが系統上、スメル時代のものに關係がつくとすれば宛も支那の方で後の隸書楷書が最初の龜版文まで遡り

得るのと同じわけでその比較研究は楔形文字の本末を明にする上に最も重要なものとなるのである。吾人はバビン文字の原刻を見る處にその字形が一見繪に關係なき如く見えてゐるものがあつてもその實は或る何物かの象形に出てゐるものならんとの感を深くするのである。

バビロン文字の實際に刻されてゐる資料のうちで最も古いものとして知られてゐるもので有名なのは左の三者である。即ち

一 エアンナタムの刻文—— inscription of Eannatum.

二 エンテメナの刻文—— Entemena

三 サルゴン一世の刻文—— Sargon I.

である、このうち一のエアンナタム王の楔形刻文は王がラガシユ

(Lagash)の王としてウンマ(Dunamu)の近都の戦に勝利を得たることを石灰石に刻せるものである。今その遺物によつてその文字を示せば象形文字に富んでゐること左の挿圖の如きものである。

これらの文字は今より五千年乃至七千年前の形式を止めてゐるものであつて、支那殷代のものと稱せられてゐる龜甲獸骨文字よりも尙一層古くとも新しくはないらしい。バビロニア文字で材料の多いのは今から四千年位以前のものであつて、刻文としてたくさん發掘されてゐる。そのうち大なるものもあれば小なるものもある。色々であるが初めその刻文は何れも濕氣のある泥土の上に刻せられる。それを太陽なり火なりで乾かしておくのであるが豫め面は文字を刻するよりも先きに一定の間隔をあけて深く切り込を作つておく。そ

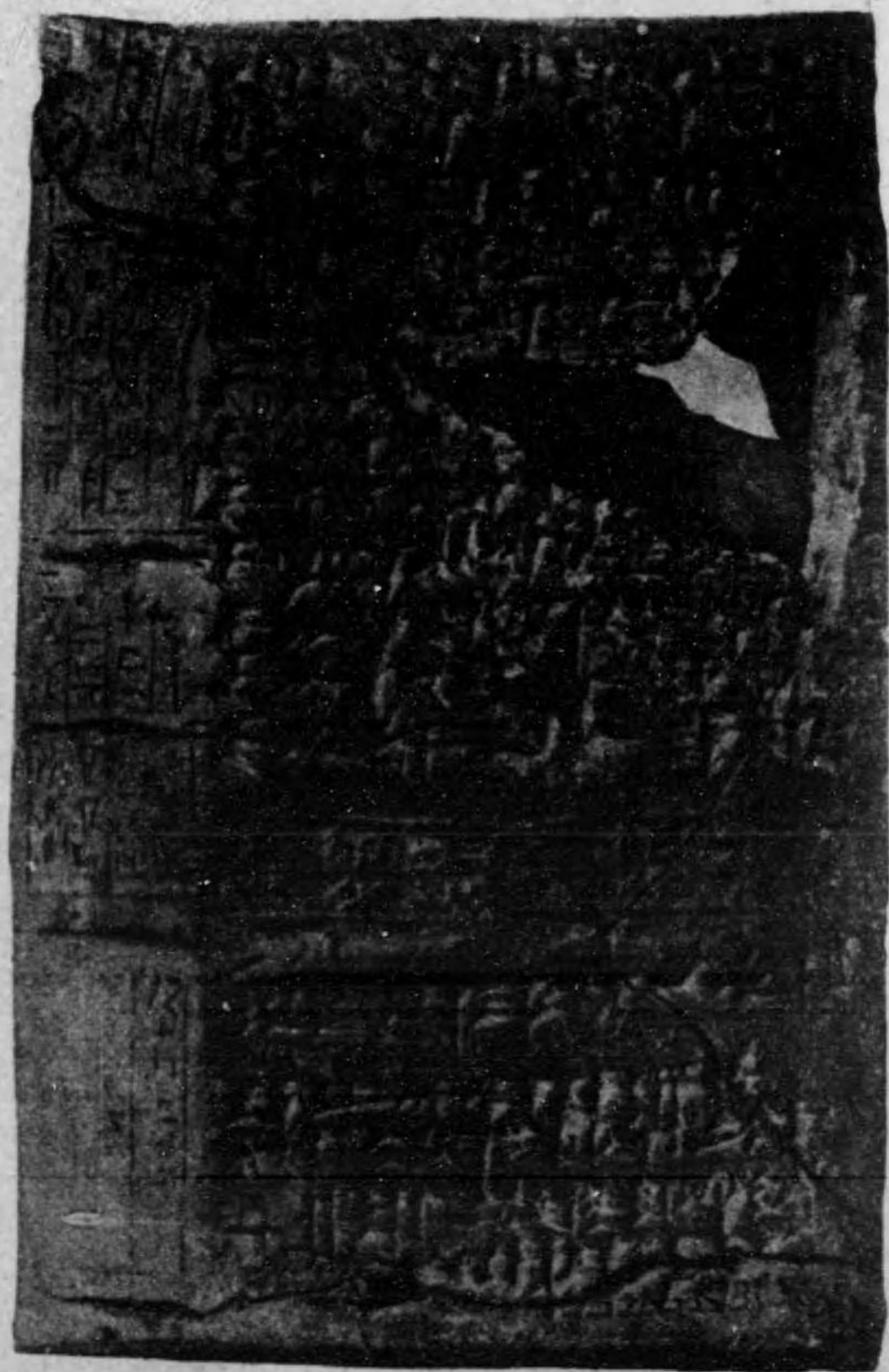


れは毀れ易いのを防ぐ爲めである。

バビロニア楔形文字の發掘で、支那の木簡發掘に似て面白いものに泥策と云ふがある。支那で木簡として見えてゐるのは漢代の木簡である爲め上古にはないやうに思はれてゐるが事實は周代にも又それ以前にもある。最古のものに龜甲獸骨以外に木策のあつたことは推知するに難くない。しかし支那に泥策のあつたことは記録にも何も見えてゐない。封泥のことは見えてゐるが、これは後世の封蠟式のもので泥に文字を封印するを云ふのである。然るに今チグリス河の流域に五千年前の泥策が發掘せられることは面白い。西人は之を *tablet of clay* と云つてゐる。之を包む爲めに又泥帙と稱する圓筒形のもものが出来てゐる。西人は之を *envelope of clay* 或は *case-tablet*

と云ひ挿圖に示す如き形をなしてゐる。泥策の方は四方形のものが多く厚みは種々あるが長さは一尺二三寸位から今少しく短かいものもある。泥策泥帙の外にまた泥柱がある。六面、八面、十四面と云へる多角の面を有してゐる。またアッシリア宮殿の下から掘出されたものに泥柱がある。之には王朝の年代記の如きものゝ刻されてゐるものもあつた。

泥策の掘出される地は多くバビロン故地の北部又は南部より出ることがわけてテルシフル Tell-sir の地に出土するものが多い。その出土の時の状態を云へば特殊の室内の棚の上に安置された素焼の壺の中に藏せられ、甚だ鄭重に取扱はれてゐたとを見る。その泥策に刻されてある言語は勿論バビロン語である。今から四五千年前のことを記



してゐる。その刻文の事項は文學、商業、法律、のことに關し、即ち土地家屋の賣買、家財、田地、庭園の貸借、奴隸の雇入、金錢、穀類の貸借、婚約、その他家事、公事、官事等に關することを記してゐる。時には地主に對する判決、財産分離のことを記せることもある。これら泥策の資料は多く大英博物館のアッシリア・バビロニア部門のところに排列せられてゐるのでひろく世界に知られ、實に考古學上の好材料となつてゐるばかりでなく、言語學上、文法上の資料としても亦甚だ貴いものとせられてゐるのである。

三 楔形文字の特色

アッシリア・バビロニア文字は之を楔形の文字と云ふ。楔はクサビで西人は之をキューネ Cuneus と云ふ。英語にキューネフオーム

Cunei-form と云ふは此のアッシリア文字のことである。キューネ Cuneiはもと羅句語でキューネウス Cuneus と云ひ Wedge (楔) のことを指してゐる。この名前よりすれば本来此楔形文字は楔形のみならずで出發してゐたものであるか又古代バビロン文字の起源までがそれであつたかと云ふに必しもさうではない。もとは繪文字に起りを發しその實物の輪廓を略畫的に示す時その文具と書きかたとの關係でクサビ形を印するやうになつたのである。書く所の道具は角の角筭様のものを以つて比較的軟い石質の面に刻してゐたのである。が軟質の石は時代の推移と共に漸く改まりて遂には半乾きの泥土が代用せられるに至つた。その刻しかたは打込んで直線的に引張り漸次かるく面より取り離らせる。その故に面には曲線や圓形は

固より自由自在の線畫の現はれて來るわけがない。現すには現はせないともなかつたであらうが、容易でなかつたであらう。然るに古代バロビンの時代には物體の如何なる形であつても、楔形の刻述を連続して象形的は現にしてゐたやうである。出來得る限り楔形を巧みに利用して實物に近い繪を描かうとしてゐた。その傍は當時の遺物に見られる通りである。アッシリア文字も形はちがつてもその刻法に至つては同一である。象形的要素は失はれて單に音として刻されてゐる丈であるがその楔形を示せるの點は毫も變りはない。何れも字の痕迹は凹い溝を遺してゐるのである。

楔形文字はかやうにしてアッシリア時代のものより古代バビロニア時代のものに遡り終始見はれてゐるのであるが、その數はアッシ

リア時代に約五百七十字を算せられてゐる。そのうち三百餘字はニ
ネヴェニnevehの泥策に見出されてゐる。更に古に遡れば遡る程字
数は少ないことと思はれるが古い時代のは未だ確言することは出来
ない。唯その字形が古のもの程繪畫的で又寓意的のものが多い。そ
れがアッシリア時代の音符的になるに約一千年かゝつてゐる。殊に
そのうち西紀前一千八百年の頃より西紀前一千年の頃の間に於いて
その發達變化が最も顯著であつたのである。之を支那の時代にあて
て考へると大體殷と稱せらるゝ時代にあたるかどうか判らぬが、上
古より周初のあたりに相當してゐることと考へられる。西方ユーフ
ラティス・チグリヌ河方面にてスメルなり古代バビロンなりの文字が
偶然にも支那上代の文字と同様に繪畫的であつたとは文明史の研究

者に興味を興へる。しかしその繪畫的象形の個々のものを採つて考
ふるに魚や鳥や刀やなどの形が一致又は酷似してゐるとしてもそれ
によつて兩者の文明に史的關係のあるものの如く速斷することはで
きぬ。これには更に該博なる各方面の調査研究を要する。支那文字
の西方起源説の如きも慎重なる批判を要することは論ずるまでもな
いことである。

第六章 埃及文字

一、ロセッタ石の文字

埃及文字は埃及人民の使用してゐたもので前述古代バビロンの文
字よりも古い文字である。現存せる最古の埃及文字資料はセンド王

時代のもので西紀前四千七百年位に迄も遡るとが出来る故世界最古の文字と稱せられてゐる。この文字は古來久しい間讀まずにそのままになつてゐたのであるがシャンポリオン(Champollion)と云へる佛蘭西の軍人が十八世紀の末葉(西紀一七九九)にナイル河畔のロセッタ石の字を始めて讀むことが出来てから、埃及學は茲に緒を得てその文字に關する研究は頓に開けて來た。埃及學の研究によると埃及の文字には三段の發達のあることが判つた。第一は繪そのものを文字となすもの。これは象形法によつて示されたるものであつて、紀念碑墓碑銘の類に見ゆる文字が主として之に屬する。第二には繪文字を音字として用ひたるものである。これは原字の字母が六百二十字でこれの組合はせて約一千七百字を生成してゐるがこれでも尙

悉くの場合には間に合はぬ。そこで唯言葉の發音をうつす丈の役目で文字本來の意味には關係なく之を使用することが始まる。これは漢字で云つて見れば假借字のやうなものにあたる。第三には字本の振假名付き漢字にあたるもので、先づ本目を書き之に讀み方の知れるやうに音字を添へるのである。埃及文字は本來繪文字であるとは云ふものの此の三段の方法がある故、必ずしもその繪のまゝの意味で用ひられないことのあるに注意せぬければならぬ。鳥の繪があつてもそれが鳥の意味でなく、唯發音上アならアと云ふ音を示すだけの目的で用ひられてゐるともあるのである。音の假借と云ふことは象形文字には是非避く可からざる方法であつて、埃及には之が盛に見出される。寧ろこの方法によれる用ひざまの方が多いかと思ふ。

二 繪文字としての埃及文字

繪文字と云へば東洋では支那文字を指し西洋では埃及文字を指してゐる位に兩者は共に顯著になつてゐる。しかし齊ひとしく繪として見る時には埃及の方が繪畫として支那のそれよりもよく精密に又生氣があるやうに稱へられてゐる。つまり支那の方のは象形とは云ふもののそれ程繪に近くはないが埃及の方のは全く繪そのものである。露骨なる象形であると云はれてゐる。これは最近十五年前までの説である。また支那江西省彰德府湯陰縣出土の龜版文が知られなかつた頃の論斷である。今日では支那の元始的繪文字はその象形法に於いて又會意法に於いて埃及のそれに軒輊する所のないものであることが事實上判明した。古代バビロニアの楔形文字でさへも繪畫的

埃及文字

發音

maau
P'x-t
(獅子)



ab
(象)


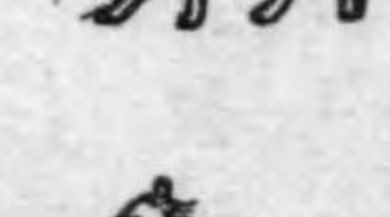


uhar
(犬)







出立點を有してゐたことが見られてゐるのである。されば埃及の文字のみが古代に於いて特に露骨なる元始的象形を現はしてゐて、その他のものは出立點に於いて既に發達した形を有してゐたものであるなどは云へないのである。

いま埃及の繪文字がその原字としていかなる程度まで象形的性質を現はしてゐるか左にその例證を擧げて見よう。即ち

Srr	
ba	
(羊)	
(山羊)	
ba	
(牛)	
htar	
(馬)	

の如きものがある。この繪そのものの形はその使用と共に漸次簡略にせられる傾向がある。一々丁寧に書いてゐないのである。これは文字發達の自然の順序である。碑銘に書くときでも時としては略體で書かれる。やがてその原字からその發音の最初の音をとりてその文字を呼ぶやうなことが始まるのである。例へば、鼻のことを埃及で *mulag* と云ひその形は鼻そのものを書く。後にその兩耳の

<i>mulag</i>	
(鼻)	· M
<i>na</i>	
(水)	· N
<i>labu</i>	
(子獅)	· L
<i>axm</i>	
(鷲)	· A

ろを採つて *mulag* の頭音で之 M を呼ぶ。又水のことを埃及では *na* と云ふ。水波の象をとりて之をその *na* の頭音で呼ぶ、或は獅子のことを *labu* と呼ぶ。そこで獅子の形を L で示し之をその頭音 L で呼ぶ。又鷲 (*axm*) の形を略して A が出てゐる。

M、N、LA などの出来かたはかくの如き起源を有してゐるのである。かやうにして見ると後世の羅馬字の出来た徑路は猶漢字から

假名が出たのと同じやうな関係である。その原字のどこかに後世の文字を胚胎せしむる要素を有してゐたものであることが判るのである。この外尙繪文字の材料になつてゐるものには色々のものがある。蛇があれば蜂もある。木もあれば花もある。又器物があり船があり、天井があり、月があり、星があり、山があり、人物があり、目があり口があり、手もあれば脚もある。又ピラミットもあれば家もあり、門もあると云ふやうなわけで森羅萬象大抵のものはある。然し文字はもと符牒的のものであつて唯その形に象つたもののみを用ひることの外に音さへ同一なれば他に流用假借する方法も行はれるに至つた。そこで鶯は激音の㇇にあてられ、蘆の葉は唯の㇇に、腕は鼻音の㇇に、そして脚は㇇音に有角の蛇は㇇に絲の形は㇇音

に、蘆二葉は㇇に、把手附きの皿は㇇に、口は㇇又は㇇_二疊は㇇に、椅子の後部は㇇に、手は㇇に、半圓形も㇇に又普通の蛇も㇇にそれから子鶯の形は㇇に纜綱も㇇に又水溜の象は㇇にと云ふやうにそれぞれ音にあてられてゐることになつた。後には已上の外に尙此の方法が盛に行はれることになつたのである。

三 音字としての埃及文字

埃及繪文字と音との關係は上述の如きものである。而してその繪文字がその字の意義に全然關係なく、たゞその音のみで用ひられるときは音字としての價值が著しく現はれる。今トレミ王の名前を埃及の原字に就いて調べて見るにこれはその英語の綴音にも見ゆる通り語頭に㇇を有してゐる。希臘にても㇇(プ) 同様に有してゐる。英

語のトレミはもとプトレミ Ptolemy 即ち Πτολεμαῖος であるがその原
名は次の如くに書かれてゐる。これはヌツンフブ (Sutrynxb = Baacv
Néas) と云へる語(王の義)に續いて現はれてゐる語でトレミ王のこ
とを云へることは疑なきことである。今この読みかたを左の方法に
より通俗的に説いて見る。プトレミの読みかたはその右読みなるか



ブツルミス
~~~~~  
Ptarmis  
~~~~~

左読みなるか。これはその周囲の囲みに縦
線——の付いてゐない方より読み始むべき
ものに定めてゐる。さればこのプトレミの
場合は左讀である。而してその囲みの中に
は音字六個を藏する。蘆の葉二枚あるは「
又は」の音にあたる字である。その他はす

べて一字一音である。即ち圖の左の上は「で」下の半圓は「日」獅子は「日」
でその下は「日」その次のものは上述の如く「日」又は「で」最後の右の端の

P₁R₃ o₁S₆
T₂ M₄(i)
~~~~~  
Pt(u)r<sub>1</sub>mis

ものは椅子の後部に象れるものでこの音をうつす。即  
ちこれ丈のものを前圖にあはして排列すると、次ぎの  
やうになる。この番號の順によつてもわかる通り埃及

文字は左から右へ整然と進まずして時には下に降り又右に行き又下  
に降ると云ふやうな行きかたをする。しかし大體はかやうに亂れず  
に一方に進んでゐる。クレオパトラなどの読みかたにしても同一に



行く。然しこは人名地名の如き固有名詞でなくては  
圍ひはついてゐないのである。けれども一般の文章  
中には此のしるしがある爲めに、文章の始めと終りの見わけをつけ

ることは容易に出来るのである。

次に音字を振假名式に用ひてゐるものを見るに例へば犬ならば犬の字を示すにその傍にその發音をうつせる文字をおく。この場合には音字の方も繪文字で書かれてゐるがこれは固より意義には關係なきものと見なくてはならぬのである。犬のことは *Uher* と云ふところからして之が發音を示す爲めに子鷺 (*E*) と金屬の束 *U* (*H*) と口 (*R*) とを結合して



その犬たることを添へ記してゐるのである。かやうにして古代埃及文字は繪文字ながらも發音式に用ひられてゐることが多いのである。

さて埃及文字にはかやうに三様の使ひかたがあるがこれらはすべて希臘人がハイエログリフイック (hieroglyphic) と云つてゐたもので、神聖な刻銘の義である。蓋て僧侶の間に用ひられた文字と誤認されてゐた爲めこの稱呼があつたのである。この文字は繪のまゝでその意味を示すものと、意味を没却して音のみを示すものであることは上述の如くであるが更に別にイデオグラム (ideogram) と稱したる觀念を代表させる丈の用法がある。蜂ならば蜂をかいてもそれが *U* と云ふ音を示す爲めでもなければ蜂そのものも示すでもなく全く別の意義「種族」と云ふこと示すと云ふ如きそれである。また捕縛された鬚男を書いて之で亞細亞人の囚虜を示せる如き、又、亞細亞人を投げてゐる人の繪をかいて之で服従、屈從などの意を寓し

てゐる。又二本の鞭を以て立てる人を下界の支配者なりとなし、又二人の武器を持つて立てる圖で戦闘を示してゐたり小羊の水邊に走れる圖で渴を示してゐるなどすべて之はシンボルと見てゐるものである。これらは碑銘文字の中にて特に注意すべき文字である。

碑銘用文字の外に埃及には尙俗用文字 (demotic) と云ふがある。

國內一般人民の使用する字體の義である。日常の實際生活に必要な字體を云ふのであつて碑銘用の形から著しく崩れて作られたものである。支那の略字又は草書にあたるものであつて、これの發達は西紀前九百年頃に始まり以後千三百年間使用せられてゐたものである。羅馬帝國が埃及の政府を掌握する時になるまでは埃及では碑銘用文字とこの俗用文字とが行はれて別に希臘文字も之と併行して使用せ

られてゐたのである。前述ナイル河畔のロセッタ石 (Rosetta-stone) の埃及文字が讀まれるやうになつたのもこれら三様の文字が對照して刻されてゐたのに由るもので、希臘文字の字譯があつたために其れが唯一の手掛かりとなつたものである。

四 埃及文字は支那字に關係なかるべし



埃及文字も支那字もとも象は形字なるが故に。單に形の上丈では似たものが多い。埃及では宗教上の關係で碑銘の文字はその元來の繪文字そのままの形を襲踏してゐる爲め、原形はよく判然してゐる。支那では之に反し用途の上に字體の保存襲踏と云ふことが嚴重でなかつた爲め惜しいことに文字の原形は必しも傳はつてゐない。支那の方の眞の原形文字と云ふものはまだ本當のところ迄判然して



のないのである。しかし假りに龜甲獸骨の刻文あたりが原形なりとすると、之と埃及の原形のものと比較する時は先づ兩者の根本的比較が出来る。双方元始形同志の比較でなくては眞の比較にはならぬ。〔ときには支那では龜版文にないものは鐘鼎古文で補ふことにしてもよろしいであらうが成る可くは古いものを採るにこしたことはない。さてこの材料によつて兩者を比べて見ると、音を抜きにして形の上丈を見ると全く一致してゐるものが随分ある。中には不思議な位に酷似してゐるものもある。之を兩者の間に史的關係があると見てかゝれば容易に連絡がつく。しかし言葉の音の方からも見なくてはならず、その觀念の符牒となる時の意味も考へなくてはならぬ。又文字の全般が現はす背景の社會の相違をも見なくてはなら

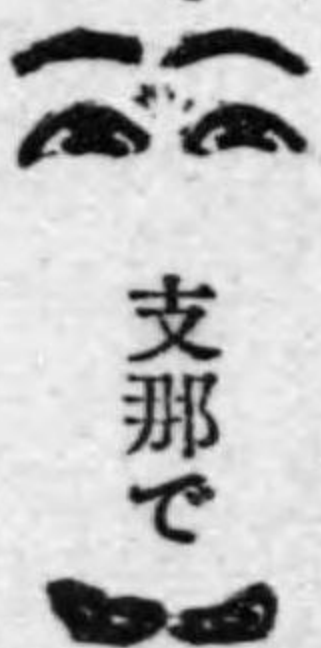
ぬ。その他時代のこと地理のこと歴史のこと文化全體に互つて八方から考察しなくてはならぬ。よし文字以外のすべての點が關係がついたと假定しても文字は更に他の方面より假りて來ることがないとも限らぬ故今一層慎重の態度をとらんければならぬのである。況んや埃及と支那との間には文字上に類似のある代りに相違の點も亦甚だ多いのであるからその全體の比較よりすれば少しかりの類似はむしろ之を偶然の類似となすべきものと思ふ。否物によつては木なり、魚なり器物なり、刀なり、弓矢なり、權力のしるしなりかくの如きものはその一致することのある方が當然なりと考へられるものさへある。強ひて關係をつけないで唯双方の現象を見る丈でも價値は十分にある。今左に双方の類似せるものを少しく列舉して、同一

の概念の表はしかたに類似のあることを示して見る。

一、尹の字 埃及で  (王)支那で  (龜版文殷虛書契卷七の十九、及び七の卅六)

埃及の王の字はかやうに冠をつけ棒を手に執れる人の象、支那の文字で之に近い構造のものは尹の字である。手に棒を持てる人の象でその棒は権力のシルシである。尹は後の音インであるがもとクンの音。埃及のはスツン(Shtn)であるから音が違つてゐる。

二、見の字 埃及で



支那で

埃及の見の字は左右の眼を書く又時として瞳ツトミのみを書くこともある。支那では懼の字に見ゆる如く對をなした眼を書く。埃及ではマ

Ima<sup>3</sup>之を發音するが支那はInと音ずる。

三、巢の字 埃及で



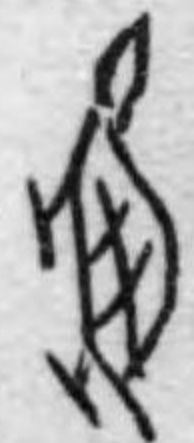
支那で 

埃及の巢の字は巢の中の鳥三羽で之を示しスのと云ふ。支那では更に之に木を配し樹上の鳥の巢を描いてゐる。

四、龜の字 埃及で



支那で



埃及で之をアプスEpsと云ひ支那では之をクワイKwaiと云ふ。

五、奠の字 埃及で





支那で



埃及で祭壇のことは牛首と麴麩と酒器とをまとめて祭机器上において。之を示す之をハイウ *kauiw* と云ふ。支那では祭机上に酒器を置いて之を示す。之をテン *ten* と云ふ。

六 簡冊 埃及では  支那では冊

埃及でて小札のことを *ht* と云ひ、かやうな形をしてゐる。これはオベリスク  (碑) に似てゐて支那の冊にあたる。 *fat* の音である。しかし支那では漢あたりの碑の形が之によく似てゐる又古の祖  の字も之に近い。

七、舟の字 埃及で



又は

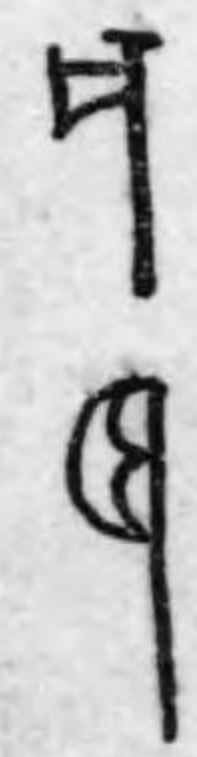


支那で



埃及には船の形は色々ある。十餘種もある。ここに示したものは玉座のあるもので *ba* と云ふ。支那では舟の字には種類多く見えず。而して孰れもその音は *pa* である。

八、戈の字 埃及で



支那で



埃及で戦争のときの戈を *akaha* と云ふ。支那では之を戈(クワ)と云ふ。もと斧の類を指してきたものでこれは一に鉞とも書かれてゐる。

九、弓の字 埃及で



支那で



埃及で弓のことをプライ<sup>prai</sup>と云ひ支那で之をクング<sup>kung</sup>と云ふ。射の字は埃及では軍士が左手に弓をもち右手に諸矢を持ち埃及式に坐せる象で之を示してゐるに反し支那では唯、弓に手を配合せるのみである。矢は添へられてゐない。

十、羅<sup>ra</sup>の字 埃及で



支那で



埃及のアミの字は閉ぢたると開きたると二種あり。ここに示せるはその開きたるを示す。その發音はソフト<sup>(soft)</sup>である。支那では罵の字罰の字すべてヒラキたる羅<sup>ra</sup>の形にて示されてゐる。羅の古音はラで鳥をとるの義である。

十一 酒の字 埃及では



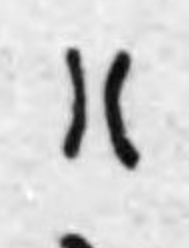
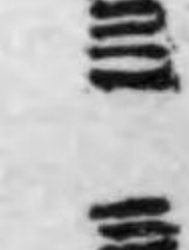
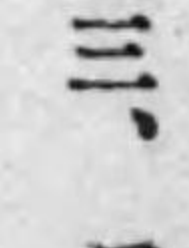
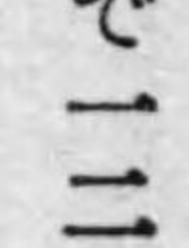
支那では



埃及の酒の字は二つの小壺を連絡したる象である。之をアープ<sup>arp</sup>と云ふ。支那では一壺で之に多の附せるものもあればないものもある。多は液體の意かも知れぬが未だよくわからぬ。

十二、一二三の字 埃及で

埃及で



十三日の字 埃及で



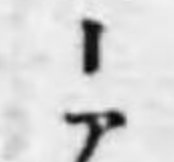

支那で



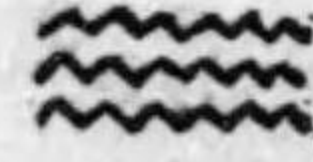


エヂプトで太陽のことをラ<sup>ra</sup>と云ひ支那ではネット<sup>net</sup>と云ふ。日と云ひ熱と云ふ。後世ではその意味がかやうに分れてゐるが出本

は同一語源から出てゐるものらしい。

十四、月の字 埃及で  支那で 

エヂプトの月の字はアリア  と云ひ支那の龜版文に見る月と最も似てゐる。しかし支那ではグワツト  の音であるから全く言語の方では別である。

十五 山の字 埃及で  又  支那では  又は  (丘)

十六 川の字 埃及で  支那では  又は 

十七 臥の字 埃及で  支那では  (楯の背後に臥

する人の象)

十八 子の字 埃及で  支那では 



十九 心の字 埃及で  支那では 

二十 首の字 埃及で  支那では 

廿一 羽の字 埃及で  支那では 

✓ 廿二 木の字 埃及で  支那では  又は

 (土の字)

廿三 魚の字 埃及で  支那では 

廿四 石の字 埃及で  支那では 



廿五 刀の字 埃及で  支那では 


廿五 矢の字 埃及で  支那では 

廿六 皿の字 埃及で  支那では 

廿七 糸の字 埃及で  又は  支那では 



✓ 廿八 口の字 埃及で  支那では 

廿九 盾の字 埃及で  支那では  (盾の字)

は  )

三十 寺の字 埃及で  (家の羽) 支那にて寺はもと侍人

の義

卅一 門の字 埃及で  支那では  支那の家はも

と 

卅二 豆の字 埃及で  (祭壇) 支那で  (祭器)

卅三 屯の字 埃及で  (花) 支那では  (嫩芽)

卅四 火(薰) 埃及で  (香) 支那では 

卅五 壺の字 埃及で  支那では 

卅六 雨の字 埃及で  支那では 

卅七 山の日 埃及で  支那では (旦)

卅八 且の字 埃及で  支那では  (祖)


卅九 橐かろの字 埃及で



支那では 

四十 毛の字 埃及で



支那では 

これは埃及原字六百二十字中より支那の文字に幾分近いものを拾ひ來たつたのである。中には弓、川、龜、魚などの如く埃及で横がきになれるものを支那に縦書きとなつてゐるものである。これは支那では文章がタテに書かれてゐる爲に向きが變じたものである。總じて右に示したものはよく似てゐる。

一に示した尹（政をとれる人）の字は身體と棒との配合で君長の

義を現はし、五の奠が神に供へる酒器や犠牲を配合して表はされてゐることはこれ亦最も似合はしい構造であつて。支那の方で尙獸（ハカリゴト）や獸（タテマツル）に犠牲の犬の字の含まれたる、これと關係がある。十一の酒は埃及では二壺で之を現はし支那では一壺で之を現はす。これは意匠の上に相違はあるが同一の容器を以つて酒のしるしとしてゐる迄は暗合である。十五の山は埃及では山の溪谷を主として現はし支那では嶺の方を主としてゐる。十六の川は水波で河川の意を示さんとしてゐる點が兩者同一である。十七の臥は支那の方では盾タテを配してゐるので古造字時代に武器の盛に用ひられたことがわかる。卅八のピラミット形の文字は、支那では祖先の祖の字の原形の且がピラミットから來てゐるなどとは思はれない



が然し祖の字の古形に三角塔形のあることは事實である。すべて埃及、支那兩國の古代に此の如き形だけの相似た現象の偶然あらはれてゐたと考へることは差支ない。その他一般に器物や動物の偶然似ることの多いのは怪しむに足りない。壺なり皿なりの容器がその象形上で一致する位のこととは別段之を重く見る必要はない。何となれば同種の自然物又は同一の目的で作られた人工的のものが文字法の上で同じ形に象られることは奇とするに足りないからである。思ふに文字以外に文化の全體と人種學上の調査並に歴史上の關係等を十分明にした上でなくては文字の相互關係を斷定することは出来ないのである。しかしかやうに見るときは埃及文字は支那字研究の上に全く役に立たぬものと見られるかも知れぬが、さう云ふわけではな

い。以上は唯歴史的關係が今日のところでは未だ見つからぬと云ふ丈である。假令歴史的關係は全くないにしても埃及と支那の兩文字は同じくこれ繪文字の發達したものであるから支那字の研究調査には必ず埃及文字の構造意匠、沿革の模様、象形の注意點など參考とすべきものが多い。勿論その文字を作つた埃及の社會、文字の背景たる社會の趣は支那と著しく異なりその地理氣候、生物なども亦著しく相違してゐる。その爲めに背景の違つたところに生じた文字法を持つて來て直ちに支那に適用することは固より許さぬ。人種學上から云つても埃及はハミ Hami 人種で支那人種とは違ふ。雷に身體のみならず風俗習慣思想が亦違ふ。従つて神なら神と云ふものゝ考へかたも互に違ひ、埃及では神を人間的のものですべて現はしてゐる

のに反して支那では天界の雷電の象によつて之を寓意せしめてゐると云ふ工合である。さう云ふやうな點に相違のあることを豫め知つておいて、文字上の類似なり相違なりのあることを研究するならば東洋古代史の研究には意外に埃及學から裨益をすることが多いと信ずる。

支那文字の研究の補助として埃及文字學を修むるは最も必要なことである。わけて支那字の研究法を一新する點より見るも泰西の文學研究法を参照することは大切である。埃及の方は形の上の研究がよほど出來てゐるが。支那の方は龜版文の發掘が最近に係る丈それ丈おくれてゐる。時には後世の象形を以てまゝ埃及のそれに對比し兩者の關係を考へんとするものすらある。例へば支那の『風』の字

を説くに當つて埃及文字の帆船の形から來てゐるなどと妄斷をなすものすらある位で時代の觀念を全く没却してその間の關係を付けようとするものがある。がしかしこれは固よりよろしくない。若し吾人が埃及文字に之を比べて研究して見ようとするには少くとも支那字の時代に就ては固より周以前よりの古い形を捕へて來なければならぬ。風の字の古形の如きも古代に遡ればその決して風を孕んだ帆船の形から來てゐるやうなものでないことが肯首されてゐるのである。要するに考へかたなり研究法なりを埃及學から採りて支那文字研究の助となすことは今後の字學には是非とも必要なことである。茲には埃及文字の支那文字の起原に關係なきことを述べる旁この研究法のこと一言に及んでおく次第である。

以上は第五章と第六章に亘りアツシリア・バビロニア文字並びに埃及文字の起源のことを述べたのであるが此の外に尙我が琉球に行はれてゐる結繩の方法（繩を結んで記憶の助となせるもの）のことがあり支那内地にも別に苗族や獏羅巴夷諸族の用ひてゐる文字のことがありその他印度系統の音字やアラビア文字などのこともある。しかし支那文字西方起源説に關係のあるものの如く唱へられてゐるものは上述二個所の古代文字である故本書にはこれ丈を述べるに止めおく。

## 第七章 文字より考へられる古代の文明

### 一 文字の綜合

字面殊に文字の構造がその當時々々の歴史を物語つてゐると云ふことに就いて大體は第一章の第一節に述べておいた。ここにはそれに本づいて更に多くの文字を蒐集分類してその總合上から得らるべき一種の文明的材料に就いて述べ、文字の出来かたのうち暗に社會の文化が明示されてゐるものであることに就いて説き及んでおく。

文字を文明史の方面から説かんとするには個々別々の觀察をなすだけでは十分でない。これは社會の背景が常に文字の原動力となり生産地となり、培養所となつてゐるとに思ひ付くならば當然さうなるべきと論斷されるであらう。文字の表面を見るときには同時にその文字構造までも察し社會の之を生み出した由來に遡つて攷察

するを便とする。つまり文字の表裏両面を観察することが出来るならばやがてその文字によつて文明史の範圍に切り込むことが出来るのである。それには一字や二字の同類字でなく成る可く多くの文字の攷察研究を要する。文字起源の文明史的研究は實に此の綜合の方法によつての種々の結論を歸納することが出来るのである。

## その一 貝の説

貝は支那の古代に海岸から離れてゐた奥の地方では非常に貴ばれてゐた。このことは禮記の雜記、少儀その他記録の上に天子諸侯の死したるとき貝をその死人の口中に飯せしめたと云ふことがあるから玉（蟬の形したるものを死人に含ましむ）と同じやうに昔しよく貴ばれてゐたことがわかる。たゞにこの含貝の事實だけでなく「貴」

の字そのものうちに貝の字の含まれてゐるのが何よりその重んぜられてゐた證據になる。尙他の文字より同類を蒐集して來ると、財の字貨の字にまた寶の字、貯の字にすべて貝を含んでゐる。貝が貴重されてゐたのでなかつたとしたならば賊の字に貝の含まれてゐるわけもなく又貧の字や貧の字に貝の入つてゐるも説明がつかなくなる。貝を盗み、貝を分けることが後世の財貨を盗み財産を分ける事に該當してゐるとを知らるときはこの貝の偉大なる力のあつたことが想像せられる。定めし今日の拜金主義のあると同じく古にも拜金主義が行はれてゐたことであらう。又租税の二字に含まれてゐる禾（稻束）を貢として入れてゐた事は後の習ひであつて本はむしろ貝を貢いでゐたものであらうと考へられる。これは貢の字に表はれてゐ

る通りである。かやうな事實によつて見ると上代の貝に對する思想は今の金銭と少しも變らない。たゞ然し今日では金以上に精神的に一層貴重視されるものが認められてゐるが支那の古は賢者と雖も大いに利貨のことを云つてゐた。辯説の上では何ぞ必しも利を謂はんと體ていよきとを云つてゐても事實上賢者は財貨がなくては賢者たるの資格がなかつたのである。左に其の證據を述べる。

莊子徐無鬼には財貨を人に分つもの之を賢と謂ふて云つてゐるが事實上財を分つてしまつては『貧』となると字面にも見えてゐる通りである。賢者は財（貝）を藏蓄したものに限り呼ばれてゐたものと思はれる。それは『賢』の字そのものに見えてゐるから反對が出來ぬ。即ち賢とは貝（財）を又（有又は取）する所の臣（人）の義

である。臣、又、貝の三要素が結合されて賢の字を成してゐると云ふことは偶然でないのである。故に曰く賢は物持ち也、富豪者也と解いて差支ない。又これによつて貝そのものが上代の人々の間に如何に尊重されてゐたかがわかる。されば貴の字、賢の字を始めあらゆる貝の字系統の文字を總合して貝は上代の貨幣なりとの推論を下すことが出来る。賄賂の二字に貝の字の含まれたる又贖贖の貝を有する賞賀の貝を有する一として看過することの出來ぬ構造を有してゐるのは深い史實の潜ひそんでゐるものと考へられる。

さてその貝がいかなる貝であつたかと云ふにその古代文字の形や古錢として使はれてゐたと稱せられてゐる蟻鼻錢などの形から推すと寶貝タカラガイ即ち一名子安貝（Caory Shell）と稱するものであつてこれは

阿非利加内地にでも、南洋諸島にでも世界中にひろく分布してゐる貨幣又は裝飾用の貝である。滿洲方面では古墳から出土した漢代の遺品のうちにこれが見出されてゐる。かやうに寶貝の世界的に重要せられてゐるのは本來その貝自身に自然に具はつてゐる特色に歸因するものと思はれるが兎に角上代支那の貝貨はこの貝であると思はれる。序に上代の貝の字と蟻鼻錢の形を左に示して置く



貝の字の古形



蟻鼻錢



寶貝

(大小不同)

上代の文字を解く上に此の貝の字のやうにその材料が格一に且つ又同一の範圍内にその意味の綜合せられる文字はあまりない。この貝の貨幣説は疑なく之を推斷することが出来るのである。

その二 糸の説

糸の字に對する古來支那人の思想は、永續、細長、聯結等色々の意味に表はれてゐるが茲に主として述べんとする點は糸と色彩との關係である。

糸は染料と深い關係がある。(墨子所染篇參照)織物となつてからでも染料に關係を有することは勿論あるが、糸そのものが染色に最も關係のあると云ふことは文字上で明白に見られる。先づ色彩を示す文字を見るに、

緑の字 みどり  
紅の字 くれなひ  
紫の字 むらさき

素の字 しろ  
純の字 白色にして光澤あり。  
紺の字 こん

緇の字 青にして赤（茜染）

緇の字 黒色

緇の字 ひ




縹の字 青黄


絳の字 大赤

の如く十幾つの文字その色を示すに糸の字を入れてゐる。これは何故なるか。緑の糸、紅の糸、紫の糸等その糸はすべて色の義を示す符牒となつてゐてその糸、工、此、青などはその語の音を示す符號に過ぎぬ。然らば糸の方は色彩そのものと密接の關係がなくてはならぬ。思ふに糸にしてその緑に染められるあり紅に染められるあり、又紫なるあり、緋なるあることを示すものである。色の種類はどのやうに變化することあるもその染められるものが糸なるとを告げてゐるものである。時には緋とか縹とかのやうに織物となつてゐ




欠

# 欠

ととなる、別段一の字を冠してゐたわけではない。大大の二字を書くことが大二となり大一となり遂に太の字を生ずるに至つた。又夷の字は人の前向きに立つて弓を翳かきしてゐるの象であるしその人の一定の場所にゐることを示すには大に一を加へて  となしその位置を現はす。いま人を加へて位となすはこの字の後世の形に過ぎぬ。二人併立せる時は之を『竝』となし更に之を略しては並と書く。又前向きの人にして頭に飾をつけたるもの之を夫となし、そのあたまを傾けてゐるもの之を  (天)の字となす。そのやゝ複雑なものには  (異)の字がある。奇異な形であるが人の前向きである。

次ぎに横向きのものであると第一に人の字がもと  であ



るから直ちに人の象たるとがわかる。鬼の字はであるからやはり人にして奇異な形のものに見える。人二人左方にむいて並べるを从(從)の字となし三人を众(衆)となし二人右方にむいてゐるを比の字となし互に相そむけるを北(背)の字となしその形はである。一人にしてあたまを大きく書けば (子)の字となり。之に辵(孫)の字となす。また二人對立又は對坐せるにも色々の形がある。



(坐)二人位置を占む



(鄉、嚮、饗)に卿相向ふ

之に對してその一人の場合のものを示せば次の如きものがある。

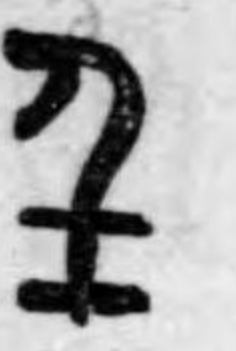
女、象形文字



(廷)一人位置を占む



(即)一人食に就く




同上



(既)すでに食事を了ふ

尙横向きのものには女の字、母の字、毎の字などがある。

 (女)

 (母)

母及び(每)

また手に玉を持つて立てるもの手に棒を取つて相對へるものがある。




(珎、珎)



(鬥)二人の鬪争を示す

この外なほあるが要するに前面向きよりも横向き文字の方が多  
い。これは文字として横向きに描寫して置く方が色々の場合に都合  
が多いこと、今一つは横向きの方が描寫の容易な爲めとに歸因す  
る。埃及文字にても前面向きよりも側面むきの多いのはこの爲めで  
ある。殊に右方にむかず、左方に向かせて書くのは書者が右手で書  
く上の都合によるもので何れの國にもこれが多いのである。

人の字が人の象形から來てゐることは今の字形から判らぬにして  
もその字義なり古形から證明せられる。之に反して大の字にはその  
原義が残つてゐない。のみならず、字形のうちにも莫だの奠だの奠  
だの、奠だのと云ふやうな大の字を含んだ如く見えてゐて本來大の  
字に全く無關係のものがあり亦の字（もとは  ）の如く大の

字に關係のあるものであつても今はその見えてゐないものなども  
ある。それ故正面向きの人の形の文字は側面向きのものに比して字  
源を明にすることがむづかしい。けれども古代文字の研究の結果に  
よつて、大及び大の字系統の文字が多く人の形に象れるものである  
こと丈は云はれるのである、殊に奠の字、奠の字などに至つてはその  
上代の風俗も之に見えてゐる。即ち



(奠)



(大)

これらは支那上代の古銅器銘の文字や龜甲獸骨の文字に散見せる  
材料中より擧げたものであるがとにかく大の字の形がもと人の象形  
から出てゐることは疑ないのである。

## その六 衣の説

衣の字は裕あはせ、桂うちかけ、褐しやつ、袴はかまに於ける如く着物の種類を云ふこととがあり、又襟すそ、裾すそ、袖そで、袂たもと、襖ひたの如く一部分を云へることがあり、又裁きり、初はつ、製せい、補おぎな、褌ふんどしの如く仕立に關することがあり、或は襦じゆと云へる字の如く色彩に關するものもある。又物の表裏などと云へる時の表だの裏だのと云ふ文字にも衣の字が含まれて面の區別を示してゐる。表は衣と毛との合字で裏とあつたものが變じて出来た形である。かやうに衣の字の現はれる場合は色々であるがもと衣とは裳（下半）に對する上半の着物の義であつてその形は龜甲文によれば次のやうに書かれてゐる。即ち

𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎 (衣)

かやうにして後世に見る衣の字が出来た。それを後に衣服の種類たると部分たると又製法たると又色合ひのことたるとに論なくひろく用ひられることになつたのである。

上述具、糸、示、又、大、衣を始めとし支那古代に於ける種々の文字を綜合しその用法上の意味並に原義等を調べて見るときは上代の文明が比較的よく推測せられるのである。支那上代の歴史、考古學と云ふものは今日の研究程度では資料に乏しくして如何とも致しがたい。しかし幸にして今文字の材料が甚だ多くその研究法の如何によりては獨り歴史や考古學ばかりでなく言語學上に又人種學の

方面にも裨益を與へることがないとも限らぬ。文字を唯文字そのものの學問上から見るだけでも固より學術上有益なことであるが更にひろく文明史の方面から他の種々の事柄に結付けて研究することができるならば現下の東洋古代文化の研究は無二の材料を得るわけである。之によるは今日缺くべからざる方法であると信ずる。

## 二 文字を生みたる社會

### その一 數字の發達

今日吾れ吾れは文字のある國に生れ文字を使用してゐる社會の人々と交り、社會に出る順序として必ず先づ學校に入り、文字を學ぶことになつてゐる。それ故文字は社會に當然あるものにきまつてゐると誰しも考へてゐる。社會に言語の使用のあると同じく文字も亦

必ず世間に使用せられてゐるものと認め文字存在の由來に就いては特に深く考へるものはないやうである。

言語は人間の動物と異なる一大條件であつて有綴の言語の行はれてゐるとゐないとは人間と動物との境目になつてゐる位である。それ故言語は人の社會と云ふ以上は必ずなくてはならぬのである。人間特有の言語が行はれてゐるのである。之に反してそこに文字が必ずしも行はれてゐるとは限られぬ。文字はなくとも人間社會は形成せられる。臺灣の生蕃を始め多くの蠻人どもがその部落々に社會を作つて生存してゐることは云ふ迄もないが文字の發達を見る迄には未だ至つてゐない。文字を持つ社會と云ふものは餘程進んでゐる社會でなくてはならぬ。文字を工夫する迄には石ころや枝の折れ端

を集めて數の記憶にそなへることをする。それすら三以上の數を示す言葉を有してゐないものが多く。そしてその三は普通よろづ、もろもろの意を示してゐるのである。少く進んだ人種でも記號的の文字を考へ出すと云ふよりは繩を結んで數字の代用をなしてゐると云ふ鹽梅である。支那がその文明の見え始めた上代に既に多數の文字を有してゐると云ふことは文明の程度が相當に進んでゐたことを證明せるものである。しかし、よろづ、もろもろの意を示すに人を三つ書いて众(衆)としたり口を三つ書いて品としたり佳(鳥)を三つ書いて**雚**(集)としたりするやうに矢張り三個のものを蒐集する方法を以て多數と云ふことを表はしてゐる。このことは元始的の表彰法と云はねばなるまい。されど數字としては文字の上に、とも

かくも五つまでを示す工夫をしてゐる。その方法は線を以て表はすのである。即ち

一 二 三 三 三 (上代龜甲獸骨刻文に據る)

である。その三に對して四を作り三に對して五を作つたのは後世のことであつて始めは兎も角も之を線で示してゐた。此の點は結繩の方法一步を進めてゐる。而して六七八九などは數でなく全く他の意味を有してゐた文字であるがその音を假りに過ぎぬ、本來は數字として作られたものではないのである。百千萬なども勿論音の假借である。數字の最初の發達はかやうに見られるが然し數詞としての言語は上代の支那人は六十までを算してゐた證據が見られる。それは十千の甲乙丙丁等と十二支の子丑寅等との配合によつて甲子

乙丑丙寅丁卯などの數へかたをなしてゐたのでわかるのである。これはもと日を示す爲めのもので十(干)と十二(支)との最小公倍数で六十まで進ませることが出来る。六十一から上はまた同じく甲子乙丑丙寅等に戻るのである。また書經などによると壬辛癸庚などの如く十干のみの用法もあるやうであるが、とに角支那上代にかくの如き曆日の數へかたの發達してゐたと云ふことは餘程の文明がなくてはこれ許り突飛に現はれて來ることは許されないのである。

上代の支那に數字の現はれて來る場合は多く上古の畋獵生活に於ける獲物の數の記載と月の記載とに在るのである。獲鹿三とか三とか云ふことがあり又月を示すにしても二月三月又、十二月とか三月とか云ふことがある。閏年であれば十三月と云ふ月があつたで

あらうから十三月と云ふも不合理ではない。これらによると上代の曆日のことは相當な發達があり六十日目に干支の一廻轉する理も了解せられてゐたと見られる。そして見るに曆は勿論太陰曆によつてゐたことが證明されるのである。數字の發達を本にして上代の文明を辿るときには此の外色々のことに關係がついて興味が深い。

## その二 父音の考

父ちちにしても母ははにしても自分の生みの親であることは世界到るところ同じ考でなくてはならぬ。その考は又ぢぢ(祖父)やばば(祖母)と語にも同じやうに推して行ける。ちちに濁音を附けるとぢぢになる。凡そ濁音なるものは密接でない遠いもの、要らぬもの、迷惑なもの、嫌ひなものなどに多く用ひらるゝ日本語の一現象であるがこ

のちち、ははに對してぢぢ、ばばのあるは赤裸々にその間の消息を告げてゐるものと見られる同時にぢぢはちちの系統から出た語なることを示してゐるのである。而してこの父と云ふ語は自分の父、即ち父親と云ふ考を示してゐるものと思はれる。しからば父の字には親子關係の意味が見えてゐるかと思ふにその字には甚だ殺風景なむしろ殺伐なる意味があるばかりである。本來古いところを説明すると父と云ふ語は打つ叩く、鞭つと云ふ意味の語でバク（搏）と云つてゐたのである。而してこは文字としても父親としての父の意味ではなく父丁とか父乙とか田父とか云ふ上代の人名にあるやうに唯一種の酋長とか君長とかの意味を持つてゐたものである。それは字形から知られる。父の字は既に前節その四『又』の説のところにも述

べたやうに手に棒、鞭を持つてゐるところを示したもので、むちは權力を示したしるしである。むちを執る人は権力者である。支配者である。又君長である、それ故役人の意味の尹の字とか天子の意味の君の字はこの父の字と相似た構造を有してゐるのである。父はむちを執つて人を打ち治めるものであつて必しも家長としての父の意味ではない。されば父の字の本來の意味は家族名としての造字でなくしてむしろ上代社會の上に立つてゐた役人としての意味に見られる。恐ろしい役人として視られてゐたものである。實際後に云ふ所の父なるものは果してこの父の字の造字意匠が之を示してゐたかどうか疑問である。

支那上古は記録以前に遡つて見ると他の未開人の間に屢見する通り

矢張り掠奪結婚の遺習が行はれてゐたものかと思ふ。一家に父親なるものは多くして實際の家長権は父の方に屬しない。又相續の権なども父親の系統に屬しない。そして家長はむしろ母親がその位置を占めてゐたものと思はれる。これは文字上からその傍證的材料を得ることが出来る。

母の字は前節その五『大』の説のところに示したやうにウマツ跪いた女の象から來てゐるものである。それに左右の乳房の指事を加へたものが母の字である。母が女の字の系統に従つて出來てゐることは疑のないとである。然るにその女の字は文字の系統上『氏』と云ふ字と密接の關係をもつてゐる。のみならず女はまた姓の字にも明白に現はれてゐる。氏が女より出で又女が嗣子となつてゐた所から姓の

如き構造が現はれて來たものと見られる。果して然りとせば父は家に多くても實際の権利は之に屬せず、母の方に屬することになり従つてその母系のものが家を嗣ぐと云ふことがあつたものと見られる。かやうに見ることが出来れば姓の字に女の字の含まれてゐることがよく解けるのである。尙歴史以前の支那社會は或は女尊男卑の風習があつたのではないかとも思はれる。さう見ると姓の字の生れたわけは益々判明する。

以上の觀察よりすれば有史以前の社會には父親は認められずして母親が認められ従つて女子の方が實際の家權を掌握してゐたもので、姓氏の繼承なども母系本位に行はれてゐたと見えられるのである。

その三 任命のしるし



凡そ任命と云ふことには何か或る物を授受するのことが必ず行はれる。王が諸侯に任命し諸侯が大夫に任命するとき又天子が公侯伯子男の爵を授けるときなどにはすべて玉(瑞)なり圭(けい)なり璧(へき)なりを任命の節即ちしるしとして渡す。また史上に御璽を賜ふのことあるもこはよほど後のとである。天子自らは自分を解して上帝の心を受け徳を以つて下萬民に臨むもので、天よりその命を下されたものだと成してゐる。そこで天子には有らゆる天界地界の中より十二のものを集め選び日月星辰、山、火、龍、雉、藻、粉、黼(斧)、黻(弓)等所謂十二章を採つて天子特有の模様定めてゐる。而して玉は玉を以てそのしるしとなし玉即ち王と云ふことに古は認められてゐる。然るに王の字は天地人の三合を意味した文字なりなどと漢の董仲舒




は説をなしてゐるが本来王玉同字であつて區別はなく、王は即ち玉を以つて自分のしるしとなし所謂王權は玉で示されてゐたのである。こは猶我國の神器の如きものであつたであらうと思はれる。又天子が圭璧の五瑞を授けて任命のしるしとしてゐたことは書經に見えてゐる如くあつてこれらのことは今更云ふ迄もなく群書に見えてゐるところである。

次にこれ迄あまり書物に見えてゐないことで而かも王なり君長なりから任命のあつたときそのしるしとして如何なるものが授與されてゐたかその點が文字の上に見えてゐることは頗る趣味のあることであるから左に一言しておく。

命の字に於いてはその下命を宗廟なり玉座なりで拜すると云ふ丈

の意味しか見えて居らぬ。即ちこは命の字そのものが△(家)と口(命令の語)と<sup>セツ</sup>リ(拜受者)とで成り立つてゐるので判る。然しこの字に別段授くる所の品物の圖は出てゐないのである。之に反して任命のありてその伺候するとか云ふ時の意味を示す文字にはその授くる所のしるしが明示されてゐるのである、それは「事」の字を見ると一目瞭然である。事は今コトとよみ仕事の義に解されてゐるが、古に於いても矢張り「事とする」「職務とする」と云ふ義が之にあつたのである。而してその意味は、授かつた所のしるしを手を持つてゐる意匠で示されてゐるのである。即ちその造字は次の如くにある。

事の字の古形、

である。この古形の示す所のものは手に或る権力のしるしを配せるものである。任命のしるしを示すには色々方法もあるであらうが手にかくの如きものを持たせて之を表はしてゐると云ふことは必ずやこれが後世の印璽にあたるものと見られる。歐洲では各國の元帥がその國王より螺甸象嵌の棒を授かつてゐるのと同じわけである。或は聯隊旗なり優勝旗なりの下賜されるのとも同じやうなもので一種の批准を與へられたしるしになるのである。尙平たく云へば辭令書を授けられるやうなわけである。上古君長にかへるものはかくの如きものを授かつたものと見られる。それ故に朝廷の朝の字にもその偏にある通り  の字が含まり、勅命の勅の字にも  だの  だのと云ふ字が這入つてゐるのである。

る。これらは一種天子なり王なりの権力のしるしであつて、王室に事へると云ふことはこれを衛るの義に解せられてゐたものである。而して上述事の字はもと武衛の任にあたるものの意であるかと察せられ。之に對する文事の方は叟の字である。これは史の古字にあたるものでやはり手に中を持つことを示したものである。蓋し古は史官と云ふ役がありその役を文字で示してゐる所のものが叟である。この解釋は尙老の字考の字壽の字などにも同じやうに適用せられる。何れも皆旗或は旗竿の如きものをその任命のしに渡してゐたもので之をその權能のしるしと見るを正當となすのである。

#### その四 血をすする風習

血をすする風習は今でもの牛の鮮血が肺病患者に歓迎されてゐる

と云ふ位で、屢話題に上る。しかし上代には病氣療養の爲めでなく祭祀の儀式に實際行はれてゐたのである。多くは犠牲の生血をすするのである。後には單に唇の一端につけるに止めて了つたが本來はすすつてゐたものらしい、所謂血祭りなるものはその古習を語るものである。

文字の上で液體であるべき血液がなぜ血と書かれてゐるか。その字の構造がノと皿との合字であるわけは如何。血は皿さに特別の關係を有するものであるかどうか。と云ふにこれは大いにあるのである。即ち皿のたかはもと高たか坏つのやうな器物でそのうちに血液が入れられてゐたことを示すものである。此の血は儀式のときには大抵用ひられて居たものである。諸侯が城下の盟でもする時には先づ此の血の

器が運ばれる。それ故に盟の字には血の字がもと含まれてゐた。今は之を皿に書かれてゐるがもと盟の下半は血とあつた。また盟の字などももと臥と血との合字であつて血器を含んでゐる。その他宗廟の建築の竣工したときとかまた銅器を鑄造したときなどには多く血祭をして祝ふのである。かやうにして血器の用途あることは疑ひないことであつて血の字が皿に従つてゐるのは偶然でない。而してその皿が高坏やうのものであると云ふが文字の上ではもと如何なる形をなしてゐたか。之を見るにはその血の字の原始形をしらべて見るとよくわかる。

血の字の古形、



# 欠